

掛川市・大東町・大須賀町 合併シンポジウム
「1市2町の融和と発展に向けて」

大東会場 議事録

と き 平成15年8月17日(日)午後2時から4時
ところ 大東町文化会館シオーネ

プログラム

- 1 開 会
- 2 会長あいさつ
- 3 開催地町長あいさつ
- 4 基調講演 「市町村合併とまちづくり」
講師 静岡大学人文学部教授 小櫻義明氏
- 5 パネルディスカッション 「1市2町の融和と発展に向けて」
コーディネーター 小櫻義明教授
パネラー 榛村純一 掛川市長
大倉重信 大東町長
伊藤徳之 大須賀町長
- 6 質疑応答
- 7 閉 会

1 開会

司会 皆様、大変長らくお待たせをいたしました。本日は、お盆休みの一般的には最終日ということで、皆様おくつろぎになる時間帯なのではないでしょうか。しかし、こんなにたくさんの皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

それでは、ただ今より掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会主催、合併シンポジウム「1市2町の融和と発展に向けて」を開催いたします。どうぞ最後までよろしく願いいたします。

2 会長あいさつ

それでは、まず初めに、掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会会長であります榛村純一掛川市長より皆様にごあいさつを申し上げます。

掛川市長 皆様、こんにちは。

お忙しいところ、また余り天気の良くないところですが、このシンポジウムに大勢の方お集まりいただきましてありがとうございます。また、日ごろ市町村合併問題についていろいろ考えていただいたり、重要な関心を持っていただいております。心より感謝申し上げます。

既にご案内のとおり、いろいろな紆余曲折がございまして、市町村合併問題は全国を吹き荒れている問題であります。日本の国は今、メッセージがない国と言われておりますけれども、市町村合併というメッセージだけは全国にいろいろ行き渡っております。中東遠が全部一緒になると、3市13町1村というような形で50万人になる。それがもう少し小さくすると2市6町26万人というような形とかいろいろあるわけですが、最終的に、残念ながらというか、あるいはそれぞれの個性、特色を生かすというようなことで、中東遠は五つに短冊型に分かれる形になっています。磐田市を中心とし、また袋井市を中心とし、それからこの地域と、そして菊川・小笠、あるいは浜岡・御前崎と五つに分かれるような傾向になりつつあるわけであります。

今日は小櫻先生の基調講演と、それから1市2町の首長のそれぞれの考えていることを率直に申し上げて、それからまた皆様方からも率直なご質問やご意見をちょうだいしたい。今、この1市2町の任意協議会は3回やったわけです。3回やったわけですが、だんだんとこれを深めていく時に、今日の皆様のご意見やアンケートの結果を非常に重要に考えて、これからの指針にしていきたいと、このように考えております。

そして、この1市2町がきれいな一つのまちになるとしますと、単純集計しただけで工業出荷額は1兆2,000億円という、一つの都市としては全国でも大きな方に入る都市になります。農業出荷額も230億円ぐらい。農業も豊かで工業も結

構あるという特色のあるまちになります。そしてまた、海があり、山があり、東海道があるというようにいろいろないい点もあるし、こちらには東京女子医科大学という、市民が一番、日本国民が一番関心を持っているのは介護の問題、あるいは自分はどこでどうやって死ぬか、誰に看取られて死ぬかという介護の問題を、そういう看護と介護の問題をやっている大学があるというようなこともあります。そして、予算で言えば、単純集計ですが500何億円という1市2町だけで予算になります。非常に力の強い、夢のあるまちを描くことが出来ます。

しかし、願わくば小笠郡は割りたくなかった。割りたくない最後の一縷の望みが残っていますけれども、平成17年3月という期限もございますので、とりあえずこの1市2町で、11万5,000人という数ですが、力のある、夢のあるまちをつくることは出来るということですので、できるだけ、南北に長いので、それを丸くする運動をやらなければいけない。千浜から掛川の駅まで15分、大東・大須賀の町から15分というような、今、全県はサーティー計画といいまして、最寄りのところまで30分というのがサーティー計画と言っているんですけども、この1市2町については15分ですから、クォーター計画というようなことでうまくいけたらいいなと思っておりますが、そういうことを今日は十分皆様方とともに議論を深めて、次のステップに臨んでいきたいと。

皆様方の熱心なご参加をご期待申し上げ、今日お集まりいただいたことについて感謝申し上げます、ごあいさつにさせていただきます。

ありがとうございました。

3 開催地町長あいさつ

司会 続きまして、開催地であります大倉重信大東町長よりごあいさつを申し上げます。

大東町長 皆さん、こんにちは。

心配されました台風でございますけれども、大雨でございますけれども比較的大きな被害もなく、やれやれといった感じでございます。

今日は、今、掛川市長さんにごあいさつをしていただきましたけれども、合併のシンポジウムということで、既に掛川市、大須賀町で開催をしまして、今日はうちのまちが最後ということで、ただ今から開催をさせていただきます。

大変大勢の皆様方にお出かけをいただきまして、感謝を申し上げるところでございます。

この合併論議につきましては、私どものまちでも去年の暮れから、それから今年の正月にかけて、それぞれの9地区でございましたけれども開催をさせていただきまして、我々の考え方、それから皆様方の考え方も聞かせていただいた経過がございますけれども、いよいよこうした時期に入ってまいりまして、今申し上げましたように、掛川、大須賀、大東でそれぞれシンポジウムの開催をする次第でございます。

ご承知のように大東町は約30年前でございますけれども、城東村、大浜町が合併をして今日あるわけでございます。そして、特に今までの経緯の中では農業のまちというようなことで農業にも積極的にいろいろな形で投資をしたり、それから町民の皆様方のご協力によりまして進めてまいった。あわせて積極的に企業誘致もしてきました。

今日は、午前中でございますけれども、掛川市長さんにうちのまちをいろいろな形で眺めていただきました。私は先般掛川市を、これはうちのまちの議会の皆様方と一緒に、ここまで掛川かなというような地区まで入らせていただいて、それぞれ様子を伺わせていただく機会がございましたけれども、非常に掛川市さんは広いわけでございます。うちのまちに比べますとかなり広い面積でございますけれども、これからそういったことも皆様方に念頭に置いていただきまして、このシンポジウムを過ぎてからも、掛川へ行ったならば、あるいは大須賀町へ行ったならば、そういう視点でいろいろ捉えていただきたいなというふうに思っております。今日は、その先駆けとなるような積極的な、しかも活性化のあるシンポジウムに皆様方のご協力を切にお願いしたいなと思っております。

ただ今から進めてまいります。よろしく願いいたします。

4 基調講演

司会 それでは、早速基調講演に入らせていただきます。

本日の基調講演は、「市町村合併とまちづくり」と題しまして、静岡大学人文学部経済学科教授でいらっしゃいます小櫻義明先生をお迎えいたしました。

講演に先立ちまして、小櫻先生のご紹介をさせていただきたいと思っております。

小櫻先生は、昭和20年生まれ。京都大学大学院を修了されまして、静岡大学人文学部の講師、助教授を経て昭和63年から現職につかれました。専門分野は地域政策論でいらっしゃいます。静岡県総合研究機構外部研究員、静岡県自治研修所講師、静岡地域学会幹事、また静岡未来づくりネットワーク代表幹事などを務めていらっしゃいます。

また、今回この掛川市・大東町・大須賀町任意合併協議会の委員として参画していただいております、新市建設計画策定小委員会の委員長としてもお力添えをいただいております。

先生は、地域に関する学際的研究動向と山間地でのむらおこしの実践を踏まえながら、人づくりという視点から地域づくりに取り組んでいらっしゃいます。

それでは、小櫻先生をお迎えしたいと思っております。どうぞ皆様盛大な拍手でお迎えくださいませ。

それでは、先生よろしく願いいたします。

小櫻教授 ご紹介いただきました、静岡大学の小櫻です。

基調講演ということではありますが、今日のメインはこの後の3人の首長さんのシンポジウムでありまして、私の役割は、このシンポジウムをスムーズに進める

ために、合併についての基本的な知識、あるいは合併についての考え方の基本というものについて皆さんに事前に簡単にお話をしておこうというものです。

今、先ほどのあいさつの中でありましたように、全国的な規模で平成の大合併というものが起きてきているんです。これは日本の地方自治体の歴史においても非常に画期的な出来事ですし、この1市2町、この大東町にとってみても非常に大きな歴史の曲がり角に今来ているという、そういう意味では、ひしひしと今正に地域の歴史というものがつくり変えられているという、そういうことを非常に痛感をするわけです。

まず、皆さん方住民の方に考えていただきたいことは、合併というのは言うまでもなく、このまちでいいますと1市2町という三つの自治体が一つになるわけですね。一つになるということは、今まで市長、町長、それぞれ3人おられたのが1人になる。議会の議員の数も大幅に縮小してくる、減少するだろうと。さらに、三つの役場が一つになる。そのことによって、3人いた課長も1人でいい、係長も1人でいい。それで自治体の職員の数も大きく減る。そういう意味では、首長さんにとってみても議員さんにとってみても、あるいは役場の職員から見ても、合併に伴って、自分たちのことだけ考えれば、いいことは何もありません。にもかかわらず、今なぜ合併ということに踏み出しているのか。

それは自分たちのことを考えてではなくて、このまちの将来をどうするのかとか、あるいは日本、あるいは世界の大きな動きの中で、この地域、そこに暮らしている住民の暮らし、これをどう守っていくのか、そういうことを考えた時に合併という決断をせざるを得ない。そういうことの意味、その重たさというものをまず住民の方々自身が真剣に考えていただきたいと思うんです。

大体、合併という時にいろいろな合併のタイプがありまして、これはお手元に配っていますレジユメの一番最初のところに、背景・要因と類型ということをお示ししているんですけれども、地方自治体が合併を決断する時に、一つは、左側にきています政府というものがどういう対応をしていくのか。特に、政府が積極的な合併促進策ということを出している、これが現代の特徴です。過去においても、明治の大合併、それから戦後の昭和の大合併、それに続く平成の大合併という形で政府が積極的な合併促進政策をやっているというのが今の特徴です。

他方、自治体は政府がどんなことを言ってどうしようとしているのかということにらみながら、他方で右側に示しています地域の実態というものを見据えて、その地域というものが経済圏・生活圏において、どう緊密に連携し一体化しているのかという、そういう地域の実態、それに応じた行政のあり方、行政区域のあり方、更に行政機構、行政組織、こういうものをどうしていくか。行政改革、行政の効率化ということにらみながら、更に将来どういうまちをつくっていくのかという、地域の振興、将来ビジョン、そういうものをにらみながら、その上で合併というものを決断するわけです。

今日の特徴というのは、先ほど申しましたように、いわば地域の実態をにらみながら合併をするということは、別に政府が積極的に合併をしると言わない時期でも、それは自主的に選択をしてやれることでもあります。今日は政府が平成の大合併という形でかなり強力に、強引に合併ということを促そうとしてきている。そういう意味では、これまでの明治の大合併、昭和の大合併と似ている点がありますけれども、私は今日の平成の大合併というのは明治あるいは昭和の大合併と根本的に違うという、このことをまず考えていただかなくてはならない。政府が言うからやるのではない。なぜ政府がそんなことを言い始めてきたのかという、その背景を考えてみるということですね。

明治、昭和の大合併は、詳しくは申し上げませんが、ごく簡単に言いますと、政府、国が中心に立って、先頭に立ってですね、日本という国をアメリカ、ヨーロッパに追いつけ追い越せ、近代化、工業化というものを積極的に促すために、国の行政の手足となって地方自治体、地方の行政組織というものが円滑に効率的に機能するように、そのために合併を促したというのが明治と昭和の大合併の特徴だと思います。そういう意味では、中央集権というものをより強化して、国と自治体との一体性、連絡、緊密性というものを図りながら、日本の経済というものの発展を促していくという、そのための合併であったと言ってもいいと思います。

ところが、今日の平成の大合併というのは全く違う状況の下で行われようとしているんです。それはなぜかということ、ごく簡単に言いますと地方分権のための合併であると。すなわち、過去の合併は中央集権のための合併であったのが、今日の平成の大合併は地方分権のための合併である。そうすると、地方分権とは一体何なんだということなんですけれども、地方分権というのは簡単に言うと、地方自治体の自立性を高めて、地域が自主的に意思決定をしてそのまちをつくっていくということでもありますけれども、今日そういう地方分権はこれまでも地方自治体はずっと長年要求・要望してきたことなんですけれども、それがようやく実現したという側面も確かにありますけれども、しかし今日の地方分権の大きな特徴は、むしろ国が主導権を握って、国のあり方、国の形を変えるために合併ということを出しているところに大きな特徴があるんですね。

それを私は大きく二つに分けて指摘出来るという具合に思うんです。一つは、日本特有の事情でありますけれども、日本が高度成長を経て経済大国になった、仲間入り出来た。更に、二度の石油危機を克服して、アメリカ、ヨーロッパというものが経済的に停滞・鎮静している時に、見事に世界のトップランナーに躍り出たというのが、大体20世紀末、1990年前後なんですね。すなわち平成の好景気、バブルのさなかです。その時に日本というものは、押しも押されぬ、いわば世界の中心、先進国に仲間入りしたんです。それはアメリカ、ヨーロッパに追いつけ追い越せという明治時代の日本の国家目標というものが到達し実現をしたんです。

そういう認識のもと、では、これからの日本はどのような方向を目指すべきなのかという、その議論の中で、実は地方分権というものが提起をされたんです。その時に二つ考え方がありまして、一つの考え方は、日本はこんなに経済大国になった。日本の経済というものは世界と密接に結びついている。世界でいろいろな出来事、天変地異を含めてですね、あるいはいろいろな紛争だとかいろいろな問題が起きてくれば、それが日本経済というものに直結していく。それで、日本は世界の大国になった、先進国になったからには、世界の社会経済秩序、この維持に積極的に貢献をすべきである。そういう意味で、国際貢献というものを21世紀の新しい日本の中心的な目標に据えるべきだという考え方が出てきたわけです。

これを国際貢献国家論という具合に呼んでいるわけですがけれども、その時に、日本は経済は一流になったけれども生活は二流、政治は三流だと。日本の政治家で国際的な政治においてリーダーシップをとれるような政治家が誕生しておらない。何でか。それは日本の国会議員の多くが、自分の選挙区のことばかり、自分が当選することばかりを気にして動いているからです。だから、自分の選挙区にかかわること、国内の地域にかかわることは、地方分権をして地域にどんどん移譲して、日本の国を預かる政治家、あるいは中央政府の官僚は、日本という国が世界に向かって何をすべきか、世界の中で日本という国の国益を守る。そういうことに専念をして政治をやるべきである、行政をやるべきである。だから、地域にかかわること、それについては地方分権を積極的に進めるべきだという考え方はです。

もう一つの考え方は、福祉国家論と呼ばれるものでありまして、日本は経済は一流だけれども、まだまだ生活は二流だと。これからは生活福祉というのものにもっと重点を置かなくてはいけない。しかし、生活福祉というのは住民の生活に身近な問題であって、それを中央政府が一律、画一的に決めるのではなくて、地方自治体にもっともっと権限を移譲して、住民に身近なところで行政をやるべきであると。そのために地方分権を進めるべきであるということですね。そういう意味では、国際貢献か、あるいは生活福祉かという、その二つのどちらに重点を置いて日本という国が21世紀目指すべきなのかという、その二つの国家ビジョンがその当時示されていたわけですがけれども、その双方から同時に地方分権というものが提起をされてきたんです。

その結果、1993年10月に衆議院・参議院両院において、地方分権の推進というものが全会一致で可決されたわけです。すなわち、日本の国会の歴史において、地方分権を進めるということが国会で決議されたのは初めてなんです。そういう意味では、正に日本という国の形を変えていくということとして地方分権というものが提起をされてきたんですね。

ただ、その時はまだ、地方分権ということは議論されても、合併というところまでストレートに議論されることは余りなかった。むしろ、その後の地方分権基本法が出来て、更に、分権を具体化するために地方分権推進委員会が設置されて

きて、そこで行われてきた事柄は、国が自治体に対していろいろ関与する、その象徴として機関委任事務というものがあり、その機関委任事務をどうするのかということに的が絞られて分権改革の議論が行われてきた。地方分権の大きな柱であります地方交付税だとか補助金だとか、あるいは地方税と国税との配分、その見直し、更に、市町村合併というものは一応棚上げにされて、先に機関委任事務という形で分権の議論が始まったわけです。それが一応地方分権一括法という形で具体化し結実して決着した後、棚上げにしていた問題をこれから議論しようという形で、まず合併というものが提起をされたわけです。

その時に、実は経済状況というものが非常に大きく変化しました。それは、ご存じの通りバブルがはじけて、そして日本経済というものが深刻な不況に陥った。経済というのが一向に良くならない。ちょっと良くなったと思って、そこで、これからは財政再建だという形で、あるいは消費税の引き上げ等々に切りかえると、経済というものが更に落ち込んで、その結果、日本の国家財政というものは極めて深刻な財政危機、破綻に陥ってしまった。

そうなってくると、いわば日本が経済大国になった、先進国になった、だから日本という国はこれからどうあるべきなのかという議論がどこか横にすっ飛びまして、むしろ、こんな膨大な赤字、すなわち国民1人当たり、小さな赤ちゃんまで含めて600万円の借金を日本の政府がしょっている。この借金を返そうにも、経済がもっともっと発展して豊かになれば返せるかもしれないけれども、経済というものは一向によくならない。そういう状況のもとで、これはとんでもないことに実は日本はなっけて来ているのではなかろうかと。覚悟を決めてですね、国民一人ひとりが自ら血を流す、負担を堪え忍ぶという、そういう覚悟をしないと、日本という国は立ち直らないという、そういうことが皆さんに認識されるようになって、ご存じのとおり小泉さんという首相、総理大臣が誕生し、構造改革というものを大胆に提起をしたわけです。

その中で明らかになってきたことは、地方分権ということが提起されてきて、それは国の形を変えるものとして提起をされてきたけれども、その国自身のあり方が根本的に大きく揺らいできている。その中で、日本という国、その中で中央政府が日本という国、国境の枠内にある地域をすべて面倒見て、どんな小さな町や村であってもナショナルミニマム、あるいはシビルミニマムといって最低限の行政サービスを保障する、国が責任を持って保障するという、そういうものはもはや維持出来ない。すなわち、国はもう地方の面倒を見る、それだけの余裕、力というものがなくなってきたんだという、そういうことが明らかになってきたという。

そのもとで、いわば、国からもうこれ以上いろいろな形で支援をしてもらうことは難しくなってきた。地域はこれから自分たちの力で自立をしていかななくてはいけない。日本という国を立て直そうと思ったら、まず自分たちの町や村自身がちゃんと自立し、自らの責任において、自助努力において経済を活性化していく、

ちゃんとした行政サービスというものを展開していく、そういう力を持たなくてはいけないんだという、こういう認識が幅広く行き渡ってきているんですね。

そして、この合併というものを首長さん、自治体の市長、町長さんが、これは大変な問題だと真剣に考えて、そして、今の合併特例法という法律の枠内であれば、ある程度の財政的な支援・援助というものを受けることが出来る。だけど、この特例法が期限切れになれば、もうアメはもらえない、ムチしかやってこない。そうすると、このまちの将来を考える時にいろいろやらなくてはいけないこと、さまざまな事業というものがある。それをやれる最後のチャンスではなからうかという。そういう形で合併というものに大きくかじを取ってきている。これが今日本における合併を促している、進めている大きな実態です。

だからそういう意味では、むしろ、政府が言うからではなくて、政府がそう言わざるを得なくなってきた政府の事情。それで、将来のまちの方向というものを考えた時に、やはりこれは何とかしなくてはいけない、すなわち、自ら自立出来るようなまちをつくっていかなくてはいけない。これが合併というものを正に促した基本的な意味だと思います。

更に、もう一つ申し上げますと、これは合併という問題の、いわば地方分権という問題の2番目の要因ですけれども、実は地方分権というのは、あるいは合併というものは日本だけではないんです。世界中で起きている事柄なんです。何で世界中で合併、分権というものが起きてきているのかといいますと、基本的な要因な経済のグローバル化です。

すなわち、人、物、金、更に情報というものが国境という垣根を越えてどんどん広がってくる。世界の市場というものがますます一つになってきている。ところが、政治というものはそれぞれ国ごと、すなわち国境という垣根で政治はくくられて、その枠内でしか政治はやられていない。だから、経済がグローバル化しても、政治がナショナルのレベルで対応しているままでは、そういう経済に対応出来ない。だから、今世界で起きている事柄は、経済的な事柄についても、一つの国が自分の国だけで頑張っても限界がある。自分の国だけで頑張ろうなんて言っているのは北朝鮮かミャンマーぐらいしかない。ほとんどの国は、国と国がお互いに手を取り合いながらいろいろな政策を考えていかなくてはいけない。

先進国で言うと、サミットという先進国首脳会議が開かれてきて、更にG7だとかG5だとか、中央銀行総裁、大蔵大臣、財務大臣の会合が頻繁に開かれていて、それぞれの政策を調整している。それも言葉を変えれば、国境という垣根が小さくなり低くなる。そのことによって、今までは国境という垣根の中にあつた地域については、その国の政府が責任を持って面倒見ていたけれども、もう面倒見切れない。国内の地域はむしろ国際的な地域間競争にさらされるようになってきている。そして、国単位で経済を発展させようというのは限界がある。

中国などもその典型ですけれども、経済特区という特別な区域をつくって、そこに外国の企業、資本というものを積極的に導入して、思い切り経済を発展させ

て、そして他の国内の地域の発展も、いわば先導、先行していこうという、そういうような形で、まず地域レベルで経済を立て直していく、あるいは経済を発展させていくという、そういう形に変わってきたんですね。そういう意味では、経済がグローバル化することによって、今までの政治の機能、政府の機能というものが、一つは国連だとか国際的な機関、国際的な話し合いに委ねられる一方、国内の地域については、中央政府が持っていた権限をどんどん地方に移譲して、地域で自ら考え、自ら行動し、そういうことを促すという動きが世界的な規模で起きてきたんですね。

これは、スウェーデンのような、あるいはデンマークだとか、福祉というものが最も充実した北欧諸国においても、同じように、いわば中央集権的な政府がいろいろな福祉をやってきたのが、もうこういう経済状況、財政状況の下ではやっていけない。だから、もっともっと分権をしようという形で、福祉に関するさまざまな権限というものを自治体に移譲してくる。だけど、移譲される自治体というものが小さな規模では責任のある行政サービスというものが提供出来ない。だから、スウェーデンとかデンマークにおいても、かなり強引ですけれども、市町村合併というものが積極的に行われているわけです。

そういう意味では、分権、更に合併というものが、正に大きな世界的な流れとして起きてきている。そこで一貫していることは、もう国に依存し、国にすがって助けてもらおうという発想ではだめであって、まず自分たちの町や、あるいは市というものをどう自立し、どう元気にしていくか、その地域の住民と行政というものが中心になって頑張らなくてはいけないんですね。そういうことが世界の常識になってきている。そういう意味では、今日、合併ということが提起をされてさまざまな批判だとか問題が投げかけられましたけれども、合併という大きな流れそのものが変わることはなかった。それはこういう背景があるからですね。

それでも、そういう流れの中で、ではどうして地域というものの自立をしていけばいいのかという問題になりますけれども、私は、例えばこの1市2町ということに言いますと、今までこの地域、特に大東町というのは、いろいろな形で工業というもの、工場が誘致・導入されてきて、農業と工業というものが非常にバランスをとれて発展をしてきた。しかし、今、国境という垣根が小さくなってきて、ものづくりの拠点というものが日本という国内からどんどんアジア、とりわけ中国に移ってきている。これは地方都市から見ると産業空洞化という問題になるわけですが、そういう問題が正にこれから起きようとしてきている。

特に、こういう地方都市に進出してきた企業ほど、外にまた工場を移転させるということが可能であり、容易なんですね。だから、これでもっともっと円が高くなって、そして中国というものがもっともっと元気になってくると、日本国内で割高につくるよりはそっちへ移した方がいいわという形で、今まで入ってきた工場がどんどん出ていくようになってくると、今までは工場があって、息子や娘の働き口あって、そして、じいちゃんばあちゃん、父ちゃん母ちゃんが農業して

いて、農業と工業というものがうまくバランスとれたけれども、工業というものがどんどん落ち込んでいって、農業だけ残されて、農業だけで自立やっていけるかという、そういう状況でもなくなってきている。

そういう意味でも、これから極めて大きな問題が起きる可能性がある。それを事前に予防する。一度来た企業が、工場が外に出ていかないためにどうしたらいいのかという、中国ではつukれないものをここでつukるしかないんです。それはどういうことかという、コスト面では負けてしまう。人件費では向こうの方が5分の1、あるいは10分の1くらい安い人件費で人が雇えるわけですからね。そのかわり、日本国内でしかつukれないものは何なのかという、より高次のもの、より高度な技術を使う。特に知識、情報というものを駆使して、簡単に外へ移せないというものをここでつukっていくしかないんですね。そういう意味では、知識、情報というものが非常に重要な意味を持ってきて、この知識、情報というもの、それを使う仕事というものが大きくウエートを占めてくると、それを支えるさまざまな事業というもの、さまざまなサービスというものが必要になってきて、それは都市というものに集積・集中していくものなんですね。

だから、そういう意味でも高次の機能を持つ都市と隣接し、そこと連携をすることによって、こういう地域に進出した企業というものは外に出たくても出られない。そういう意味では、この近くの都市ということでは掛川という都市があって、新幹線の駅がある。そういう意味でも、掛川というものと大東というものが連携をし、掛川という都市をこの地域はいかに利用し活用するか。そういう意味では、掛川と一緒にあって、むしろ吸い取られていく、端っこに追いやられるのではなくて、むしろ掛川という都市をどう大東として利用し活用していくのかという、そういうまちづくりというものが正に今求められているわけです。

だけど、これからの産業というものは都市だけでは成り立っていかない。というのは、頭を使う、知識を使う仕事を中心になると、快適な生活環境というものがいい。豊かな自然環境がある。そういう地域で頭を使う人というのはのんびり休めるんです。だから、こういう大東のようなまちにゆっくり、のんびりと住んで、頭を休めながら、必要な情報、知識というものをすぐ近くの掛川まで行って、更にそこで新幹線で東京まで行って最先端の情報というものを簡単に入手出来る。更に、インターネットという情報通信網を巡らせれば世界といろいろな形で交流出来る。そういう意味でも、こういう快適な生活環境。こういう豊かな田園というものが広がった地域。こういう地域も高度なものづくり都市としてこれから発展していく可能性というものを大いに残されているわけです。

それを可能にするために、この掛川と大東、大須賀という、南と北という形で隣接している、近接している都市というものがつながって太い南北軸というものをつukっていく。都市は都市のいいところ、農村は農村のいいところという、そういうものを生かして地域というものが自立をしていけるわけです。そういう意味で、私はこの1市2町の合併というものは、正に自立出来るまちづくりのき

かけであり、そしてまた、来るべき産業空洞化、すなわちここに進出した企業が外に出ていく、そういうことにならないようにそれを事前に回避する。予防する。そういうまちづくりのきっかけにこの1市2町というものの合併がなるのではないかと思います。

そういう意味で、そういうまちというものをこれからどうつくっていくのかというのは、正にこれからこのすぐ後に始まりますパネルディスカッションの大きなテーマでありますので、私の話は一応これで終わらせていただきまして、この後のパネルディスカッションで更に議論というものを深めていきたいと思っております。それでは、私の話はこれで終わらせてもらいます。

住民意向調査結果報告

司会 小櫻先生、どうもありがとうございました。

それでは、引き続きましてパネルディスカッションに移らせていただきますが、準備をいたしますので、どうかしばらくお待ちくださいませ。なお、このお時間を利用いたしまして、6月に実施いたしました住民意向調査結果をご紹介させていただきますと思います。皆様にお配りいたしました資料の中に調査結果速報の資料がございますので、どうぞそちらをご覧ください。

この調査は、住民の意向を把握いたしまして、新都市の建設計画などに反映していくことを目的として実施いたしました。対象でございますが、1市2町にお住まいの20歳以上の方から無作為に抽出いたしました4,500名の皆様に郵送で配布し、また回収いたしました。全体の42.16%に当たります1,897名の方々からご回答をいただきました。

それでは、主な結果をご紹介させていただきます。まず男女比でございますが、男性が42.7%、女性が55.6%の方々からご回答いただきました。また、20歳代から80歳代以上までの幅広いの方々からご回答いただきました。

さて、問6でございますが、合併への関心につきまして、「大いに関心がある」、「少し関心がある」の両方を含めまして、約7割の方が合併に関心をお持ちだということがわかりました。問7、合併で期待する効果といたしましては、役所の人件費など、「経費の節減が出来る」が最も多く、続いて「今までとは違った発想のまちづくりが出来るのではないか」と期待されております。続きまして、問8は合併への心配について、「税金や使用料など住民負担がふえるのではないか」が最も多く、続いて「中心部と周辺部に格差が生じないか」となっております。問9は現在の行政サービスに関して、満足度が21の分野で示されております。問10です。新都市のまちづくりに積極的に活躍すべきものとはといった問いに対し、「福祉・介護施設のネットワーク」が最も多く、続いて「1市2町を結ぶ幹線道路」が続いております。問11、新都市の望ましい姿につきましては、「保健・医療・福祉の充実したまち」が最も多く、続いて「自然環境の豊かなまち」、「安心・安全なまち」が上位を占めております。問12、優先的に取り組む

べき施策につきましては、やはり「医療や福祉の充実を図ること」、「バス・鉄道等の利便性を高めること」、「行政組織の合理化や財政の健全化を図ること」、また「道路をよくすること」が上位となっております。

なお、この調査結果につきましては、そろそろ皆様のお宅に届いておりますかもしれませんね。合併協議会だより8月号に掲載されておりますので、どうぞそちらもご覧ください。

5 パネルディスカッション

それでは、お待たせをいたしました。ただ今からパネルディスカッションを始めさせていただきます。

初めに、コーディネーターとパネラーの皆さんをご紹介します。

コーディネーターは、基調講演に続きまして静岡大学教授の小櫻先生にお務めいただきます。よろしくお願いいたします。

そして、パネラーでございますが、こちらの方から伊藤徳之大須賀町長でございます。

そして、真ん中、榛村純一掛川市長でございます。

そして、大倉重信大東町長でございます。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

小櫻教授 それでは、今日のメインでありますパネルディスカッションを開始させていただきます。

まず冒頭に、このパネルディスカッションのどういう形でやっていくのかについてごく簡単にご紹介しておきますと、最初に、まず3人の首長さんに、それぞれあいさつも兼ねて、このシンポジウムに対する期待及び臨む姿勢について簡単にお話をいただいて、3本の柱について議論をしていきたいと思っております。

第1の柱は、合併の必要性と問題解決の方向性について。これが第1の柱でございます。

2番目の柱としまして、1市2町が持つそれぞれの資源と魅力について語っていただきます。これも二つに分けて、まず、おらがまち自慢という形で、それぞれのまちの資源、魅力ということについて語っていただいた後、合併相手である、いわば結婚相手である他の市町についてのこういう魅力があるよという、そういうことを語っていただきます。これが2番目の柱です。

3番目の柱としまして、では、これからどういうまちをつくっていくのかという、そういう新しい市の将来ビジョンということについて語っていただきます。

以上、3本の柱を基本に議論を進めさせていただいて、最後に、全体まとめ、補足という形で発言をしていただいて、その上で会場から、皆さん方、ここの点をぜひ聞きたいという、そういうご質問、あるいはご意見というものがありましたら、会場から発言をしていただいて各首長さんに答えていただくという、そういう形で進めたいと思っております。

一応順番としましては、最初に大須賀町長、それから掛川市長、そして最後に地元の大東町長という形で発言の順番にしていきたいと思います。

それでは、あいさつを兼ねて少し簡単にご発言をまずお願いしたいと思います。では、伊藤町長からお願いします。

大須賀町長 皆さん、こんにちは。大須賀町長の伊藤徳之です。

今日は大勢の皆様方にお集まりをいただきましてシンポジウムが出来ますこと、心から厚く御礼申し上げる次第でございます。

合併の必要性等、先ほど先生の方からいろいろお話ございましたが、また後ほどもございますので、私は、今回の合併につきましては必要性等は皆さんにもうご案内のことが多いのではないかなというふうに思いますが、ある一面、非常に50年に一度くらいの変化、大きな変化でございますので、どうも先に不安があるのではないかと考えております。私、自分のまちの「広報おおすか」に書かせていただいたことがあるんですが、今回の合併につきましては、一つの時代の文明の進化、発展の中で行われていくものであり、皆さんが合併についての不安等を持たれているというようには思いますが、それは私どもが克服していきけることであるし、また克服していかなければならない問題だというように住民の皆さんに広報でお知らせをしたことがございますが、どうも不安が先になりがちですが、皆さんとともに力を合わせて、信頼と融和の中でこの問題に前向きに取り組んでいきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

小櫻教授 ありがとうございました。

引き続き、榛村市長お願いします。

掛川市長 先ほど会長としてのごあいさつを申し上げましたが、今何を考えているかといいますと、残念な気持ちと非常に前向きの気持ちと両方あります。

残念な気持ちというのは、合併の話が住民・市民の方々には唐突に2年前に起こって、それで、あれよあれよという間に新聞記事だけが出て、枠組みの話だけになってしまったんですね。本当は、これから何が住民・市民にとって大事であるかということで、医療の問題とか介護の問題とか、それから消防・防災のこととか、中東遠には幾つか病院があるけれども、本当に頼りになる病院をどうつくればいいのかとか、あるいは一番これから大事なものは予防ですね。病気の予防が一番大事ですけれども、本当の人間ドックをしっかりとつくるには、25万人ぐらいの固まりがないと予防医学センターというのは出来ないんですね。そういうようなこととか、そういう生活に密着した問題から合併論に入っていくと、どこどことくっつくとうなるのかという枠組み論だけで先行してしまったので、その点は大変皆さんに申し訳なく思っています。

でも、そういう事実としてそうってしまったので、今度はそれじゃ十分これから意味のある、それから夢のある、そして皆さんのやる気が出るような合併論にしていかなければいけない。今日はその第一歩であるというふうに私としては

考えておりました、さっき小櫻先生が必要性とか、今なぜ合併かというお話をしていたんですけれども、なぜ枠組み論から入っちゃったかといいますと、端的に言いますと、国の方でアメとムチをポンと、17年3月までに合併したらアメとムチがありますよということを、そういう言葉ではないですけれども言ったわけですね。

つまり、アメ玉というのは、17年3月までに合併したら、7割政府が償還する合併資金を出しますよと。借金してもいいですよ、7割国が返してあげますと、こういう7割補助を認めて、大いにやりなさい、17年3月までに合併したらという話。それから、交付税もいろいろ来ているけれども、合併したら合併する前の交付税は保障してあげますよと、17年3月までに合併すれば。それから、しなかったところは、それから後は合併がどんどん交付税が減っていく一方ですよということ。それから、これからは交付税がどんどん減りますよと。だから市町村はやれなくなりますよと。それから、財政力指数でいうと8割3分ぐらいか8割以上の財政力指数のところは交付税は来なくなりますよというような脅かし、ムチが言われたわけですね。それじゃ大変だというのが急に起こった理由です。

しかし、それだけだったらけしからんということですから、やはり明治の大合併、昭和の大合併、平成の大合併という、誰が指図したかわからない、見えざる手で合併論議が起こっているということも、時代の声としてあるということも事実ですし、我々はしっかりしたまちをつかって、これから世界の潮流ですからね、地方分権とか地域自立というのは世界の潮流です。ですから、そういう中では、1市2町が一緒になってしっかりした自立した地域をつくるということは非常に大事なことだということで、今日2時間弱のこの時間に、皆さんと出来るだけ心と心が新しい都市に向かって、新しい人生に向かってつながっていけばいいなと、このような気持ちで臨んでおります。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、大倉町長、よろしく申し上げます。

大東町長 それぞれ、今、掛川の市長さん並びに大須賀の町長さんからお話ございました合併についての必要性でございますけれども、特に基調講演の中で小櫻先生からその点も触れられております。私どものまちでは、もう1年ぐらい前になりますか、議会の懇談会の中で合併の必要性というようなものもいろいろ話をした経過がございます。私は、その時特に申し上げたのが、今それぞれの首長からお話ございましたように、日本の国はさまざまな形態の中で、ある時期を区切った中で、それぞれの行政組織が大きくなってきた経過が、歴史があるわけがございます。

特に今回の平成の大合併につきましては、我々が十分理解出来る点は、かなり日本の国の中のいろいろなシステムが高度になってきた。簡単な例でいきますと、昭和の大合併当時は、まだ昭和30年代前半でございましたが、それぞれの私どもの行動というのはまだ自転車を中心の時代だったわけがございます。そうします

と、行動半径というのは恐らく1日5～6キロぐらい。それがやがて車の社会になりまして、この行動半径というのは約10倍ぐらいに拡大をしてきた。そうしますと、好むと好まざると、これは一つの組織が大きくなるのは当然な結果ではないかなと思っております。同時に国全体でも、そういうことで、今まで全てが国が細かなところまで手を差し伸べてきた社会全体を、これからはそれぞれのある程度大きくなった中で自立をしていかざるを得ないのではないかと、こんな経過が前段にはあろうかなと思っております。

そういうことを考えますと、当然のことながら今回のこの合併につきましては我々は受けて立つ。そして、どうしたら町民の皆さんあるいは我々が理想とする形の合併が出来るかというのをまず大前提に頭に置かなければならないかなと、そんなことをごさいますて、今回はこれが理想の形とは到底言えないかもしれませんが、今1市2町の前に合併の問題ではだかっているのは、やはり1市2町で十分協議した中で、これを一つの組織にしていく、こういうことではないかなと思っております。

なお、これにつきましては私は基本的な考えとしては、今まで同じ歴史の中で育んできた地域でございますので、出来ることなら小笠郡全体、そして掛川を含めての合併が理想だということを言い続けてきましたけれども、それぞれの地域においては異なった考えもあるわけでございますし、そういうことで、残念ながら今はそういう形になりませんですけども、ここは私は市長さんにも申し上げておりますけれども、それぞれの地域を尊重しながら、そして私どもはここでしっかりとした将来に向けての基盤をつくっていく、こういうことでどうだろうかというような提案もしております。これにつきましてはいろいろ若干疑問がある方々もあるかと思っておりますけれども、今はそんな考えの中で、これから期限がありますので、肅々と1市2町の合併に進んでいくべきではないかなと、そんな考えであります。

以上であります。

小櫻教授 ありがとうございます。

あいさつも兼ねて発言をしていただきましたが、これでいよいよ本番に入りたいと思っておりますけれども、最初の合併の必要性について、これは先ほど既にあいさつの中でも触れられていると思っておりますので、それと重ならない程度に、改めてそれぞれ合併の必要性についてお話をいただきたいと思っております。

それでは、伊藤町長からまたお願いします。

大須賀町長 私、幾つかの合併の必要性があろうかというように思っておりますが、私からは1～2点だけ申し上げます。

まず最初に、住民の皆さんの生活圏の拡大が挙げられるというふうに思っております。先の昭和の合併から、やがて50年になろうとしておりますが、当時の私ども大須賀町のメインの県道相良大須賀線は砂利道でございました。現在は素晴らしい舗装になり、また国道150号というような大きな国道も通過をいたしてお

ります。そのように、道路を初め、また最近では通信等も飛躍的に発達をして進化をしてきているというように思います。

そういう中で、住民の皆さんの生活も、日常の買い物におきましても、一つや二つのまちを越えて買い物に行かれるというようなことですし、また、車で5分か10分走れば隣のまちの役所に到達するというような発達ぶりの中では、現在この市町村界というものがどんな生活の中において意味があるかなというように考えております。皆さんの生活等につきましては、既に町村界をはるかに越えているにもかかわらず、地図の上では歴然とした町村界があるということで、言ってみれば50年前の服を着た行政体というものがまだ残っていることによって、いろいろな部分について不合理さ等が今浮かび上がってきていると。こういうようなもの、また行政改革というような効率性の面からしても合併というものは必要ではないかというように考えております。

また、先ほどから話題になっております地方分権のことではありますが、中央集権から地方分権への流れは世界的な流れであり、住民の皆さんが求めているものは、私どもの行政に対して、非常に多様化したニーズの高度化した課題を皆さんから私どもは受けているわけですが、現在の私どもの行政の範囲あるいは規模では皆さんのニーズに応えていけないというようなことで、いろいろなギャップが生じてきているというのはご案内のことだというように思っております。

その辺を規模の拡大と効率性も含めて考えながら、総合的デパートとして、住民の皆さんの更に高度化していくニーズや課題に的確に応えていく、そんな能力が地方分権の中では求められているのではないかというふうに思いますし、また、国から独立をしていくわけでありますので、自主自立、自分のことは自分で考え、自らの行動の中で決断をし、また責任を取れるような行財政の規模にしていくべきだというように思っております。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、榛村市長、よろしく申し上げます。

掛川市長 どうしても話が重複しやすいわけですが、私は、合併の必要性をわかりやすく五つにまとめて皆さんにご説明しています。

第1は、今、伊藤さんもおっしゃいましたけれども、地方分権の受け皿をちゃんとするためには、やはり最低でも特例市、20万人以上ないと力が出ない。例えば、役人になりたいという人がいたとしますと、どうしても国家公務員、その次に県の公務員、それで市町村となって、上下の序列意識がありますね。そうではなくて、これからは国家公務員よりは自治体の公務員になりたいという時に、信頼して、やる気を持って入るには、やはり20万人ぐらいの固まりの都市なら、よし、ここでやってやろうという気持ちになると思うんですね。それと同じで、小笠山に住んでいる鳥も、いろいろな虫も、やはりこれはこれで大事なものだということになると、地域は自立して、国の縦割り行政に対して総合行政をやらなければいけない。その総合行政をやるための分権としての自立する最低単位は20万

人以上だろうと。しかしやむを得ず今11万5,000人になっているんですけれども、そういうふうに思うんです。それが一つ。

二つ目は、今、伊藤さんがおっしゃったことでほとんど尽きていると思いますが、行財政改革としての市町村合併。いろいろなものを節約しなければいけない。いろいろなものが全部節約出来るわけですね。同時に、行動圏が速くなりました。今、大東町に掛川市民で通勤・通学に来ている人が1,000人ぐらいあるんです。それから、大東町から掛川へ来られている方も1,300人ぐらいあるんですね。そういうように、働いている人は、あるいは看護婦さんも大東町から掛川の市立病院に勤めていただいている方は40何人いらっしゃいますね。そういうように、本当に最後に残っている壁が市町村の壁なんですね。だから、それを行財政改革で破っていかなければいけない。

3番目は、少子高齢化とか、中国が攻めてくるとか、野菜でもって攻めてくる。あるいは、いろいろなことで中国とのグローバル化と少子化・高齢化という新しい事態に対応する必要がある。これが3番目。

先ほど言った、4番目は、アメとムチというものについて、これは現実主義的なことですが、これを活用しない手はないだろうと。普通だと、青田のトンネル、大東と掛川、あるいは大須賀町、その壁になっているのは小笠山ですね。あるいは陣場峠ですね。これを自然破壊をしないように風通し良くする。それには相当のお金がかかるわけですが、これは特例債を活用する以外にはないのではないかと。というようなこともありまして、先ほどごあいさつでクォーター計画、15分計画ということをおっしゃりましたが、そういうことをこの際一挙にやってしまうことがいいのではないかと。

最後が、そういうことを全部含めまして、大東・大須賀の海岸線は1万200メートルあります。10キロですね。10キロの海岸線、そして約1,000ヘクタール以上の砂地農業がある。そして、平野があって山があって、また平野があって東海道が大動脈が通っている。そして、また北部に山間部というようなことで、小櫻先生がどこかの会場でおっしゃったように、海があって平野があって、山があって平野があって山がある。それで、真ん中にサンドイッチのビーフに当たるのは新幹線であり東名だと。だから、この地域はサンドイッチ都市だというようなことをおっしゃったんですけれども、うまいことをおっしゃるなと思いましたが、そういうように、合併というのは異質のものが掛け算効果になる。

そうすると雑種共生的になるんですね。だから、海の民族と山の民族が一緒になって、物すごいたくましい民族が生まれて、しかも東海道を走っている新幹線や東名で走っている人たちとまた掛け算という、そういうクロス効果が非常に出る、新しい力強い都市が出来るのではないかと。そのように、そういうものをつくるものとしての合併と。

以上、5点、私は思っております。

小櫻教授 ありがとうございます。

では、大倉町長、よろしく申し上げます。

大東町長 それぞれ伊藤町長、榛村市長さんのお話と全く同じようなことでございますけれども、非常に、町民の皆様方といいますか、就職のことを考えましても非常に広範になってきているということになりますと、それぞれ町民の認識、意識というのが非常に範囲が広がってきております。今までのような形で、例えば大東町でいきますと、基本的には農業のまちであるという前提の中で企業誘致をしながら来ておりますけれども、今度は町民の皆様方がそれぞれ広い範囲に就職を求めて、現実的に就職しているということになってきますと、非常にその方々は広い範囲の行政の情報を得ている。こういう時代に入ってきているわけでありまして。

今、役場の職員、我々を含めまして、そういうことを念頭に置いた中で行政をしていく必要に迫られてきているわけでございます。要するに、今までと違った形の中で、もっと広い範囲で行政展開をしていく。これはもう好むと好まざるとにかかわらず町民の皆さんがそういう感覚になってきているものですから、そういうことを申し上げながら、合併はどうしても必要であるというふうに思うわけでございます。

それぞれここで申し上げているのは1市2町の範囲でございますけれども、特にそれぞれお互いに持ったいい面があるわけでございます。私は、ごく最近、役場の職員の方から、担当の職員の方から、大須賀町さんのいい面、掛川市さんのいい面、大東町にないというような面を資料等いただいて、ここに持ってありますけれども、早くそういうことも我々は認識した中で、合併の一つの課題、協議事項というような形の中で進めていけば、よりお互いのまちも認識出来るものですから、合併もスムーズにいくかなと、そんなことも考えております。

いずれにいたしましても、今テーマとして司会の方から掲げられたものにつきましては、好むと好まざるとにかかわらず、そういう合併をしていくべきだなというふうに思っております。

以上でございます。

小櫻教授 ありがとうございます。

合併の必要性ということは、もう皆さんは、今更何だという、そういう思いもおありかと思えますけれども、実は、その必要性の中から、これからどういうまちをつくっていくかということにつながるさまざまな提起も既にされていると思います。

それでは、引き続きまして、2番目の柱であります1市2町の持つ資源と魅力について語っていただくわけですが、私は、合併というのは、いわば大きく地域がまとまって自立を目指すべきであると、地域全体として発展していこうと。その時に、その地域自身は、もっとそれぞれがより小さな単位で個性的で魅力的なまちをつくっていく。個性化し魅力的なまちが、それぞれ広域的に横につながって地域が自立出来るという、そういう意味では、サッカーにしても野球に

しても、個々の選手というのはみんな個性的であって、それぞれの特徴、能力というものを非常に持っているわけですね。そういうものが組み合わさって大きな力を発揮する。

そういう意味で、この1市2町、どういう個性と魅力をそれぞれ持っているのか。そういうことにつきまして、一応最初に我がまちの魅力ということについてまず語っていただいて、その次に、二巡目で、一緒になるまちのこういうところが魅力だという、そういうことをご発言をまたお願いしたいと思います。

それでは、大須賀町長、伊藤さんからよろしく申し上げます。

大須賀町長 私どものまち、ご案内のとおり1580年に出来ました横須賀城というのが、歴史の中では今一番重みのあるものとして、埋蔵文化財等の発掘をしながら保存に努めているというのが現状でございます。まずは歴史・文化等がそれらの流れの中で、今までお祭りを初めとしているいろいろなものが育まれてきたというように考えております。

また、自然の中では掛川さんにはない遠州灘ですよ。マッコウクジラにも選ばれました。いい海岸があるということだというふうに思っております。この海岸の砂地につきましては、これから子供たちが学校が週2日休みになって、体験的なことが重要視されるような時代の中では、更にそういうような学習の素材としても素晴らしい海岸線を持っているというように考えているところであります。

これからも、今もやっておりますが、歴史や町並み等を生かしたまちづくりというものも懸命な努力をしているというのが私どものまちの魅力ではないかなというふうに思っております。もちろん先輩の皆さんのご努力で産業等につきましても、現在大変私ども恩恵に浴しているものも多くあるということもご案内でございます。

以上です。

小櫻教授 ありがとうございます。

海のある大須賀町に対して、海のない掛川にはどんな魅力があるのか、榛村市長、よろしく申し上げます。

掛川市長 余り自慢話ばくなるのも良くないと思うんですが、事実だけの申し上げますと、掛川は面積が非常に広いんですね。例えば186平方キロあるわけですが、これは現在の磐田市が1市3町1村で合併する面積よりももう既に大きいんです。今度磐田市が1市3町1村で合併すると165平方キロですね。掛川はもう既に186あるわけです。2,000ヘクタールも多いんです。ですから、今度大東町さんと大須賀町さんと一緒になると、これは266平方キロになりまして非常に大きくなるわけですね。その中のうちの山が半分以上あるわけで、山が多いということは余り価値がない、経済的に価値がないと言う人がありますが、炭素を一番固定しているとか、降った雨がゆっくりきれいな水で出てくるところが広いと、こういう自然が豊かであるとかいうようなことになると思うんです。

一番これから大須賀や大東の方々に使っていただく部分は、やはり東西の大動

脈だと思っんですね。東西の大動脈は、まず最初は明治22年に出来た東海道本線です。そして、その次に国道1号線、東海道線が出来て、そして、更に第一東名が出来て、そして新幹線が出来て、そして第二東名が出来つつある。今、鉄道で掛川を横切っている人、1日25万人いるんですね。新幹線で横切っている人、23万人とか。そういうわけで、その人たちとどういう触れ合いなり、情報を得るとか、物すごい情報ルートが通っているということですね。それから、自動車にすると1日10万台通っているわけです。ですから、この10万台通っている車をどういうふうに活用するかとか、道の駅をつくらうとかいう話もあるわけですが。

そういうように、東西の大動脈が駅とインターと、そのほかいろいろな意味でこれから、もし前に大須賀の町長さんで大石さんという方がいらっしゃいましたけれども、先人が小笠山の南を東海道本線が通ることを誘致、大賛成してどんどんやってくれたらば、今の大須賀町と掛川市の状況は逆になっていたはずだというようなことをおっしゃったとか嘆いたことを覚えています。そういうような東西の大動脈、つまり、今、日本人は好むと好まざるとにかかわらず首都圏3,500万人と付き合わなければならない。3,500万人とのアクセスが出来る。もっともそこから来てもらうにしても行くにしてもという意味で、皆さん方にも大変協力していただいた新幹線の駅が出来たということは何物にも代え難い、都市が大きくなればなったでいい資産になるのではないかと、こう思っています。

そのほか歴史的なこととか言えば、掛川城と高天神城と横須賀城とあるわけで、昔、武田信玄と徳川家康が戦ったころ、「高天神を制する者は遠州を制す」と、こういう言葉があったくらいですね。そういうようなわけで、お城については武田と今川と徳川家康の攻防、戦った地域である。戦国時代に一番中心地域として戦ったところであるというような歴史もあると。

いろいろたくさんの方がありまして、そして、先ほど申し上げたように工業出荷額も掛川市が8,000億、大東町も3,000億というように、農業の中心でもあるけれども、工業も静岡・清水市より多いというような状況になっているわけですね。これは本当に皆さんで協力して努力した、いいまちが出来たということだと思うんですけれども、先ほど申し上げたように、海と山と掛け算効果が出れば、そして、更に東西の通過する情報ルートとが掛け算効果に出れば、物すごいエネルギーが発揮されるのではないかと。そして小笠山の広大な自然がある、あるいは10キロの海岸線があるというようなことで、非常に希望が持てるいい都市が出来るとのではないかと、このように思います。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、大倉町長、地元町長でちょっと話しにくいかと思っておりますけれども、改めて町民の方に、自らのまちの資源の確認という意味も含めましてお願いしたいと思っております。

大東町長 私は、大東町の状況としましては、全く地理的、それから海岸を持っているということ、また大東町も旧城東村の北地区にはそれなりの山もあるという

ことを考えますと、全く大須賀町と大東町は似たようなまちであるなというふうに認識をしているところでございます。

若干、大須賀町さんは城下町というようなことの中で歴史的にも違いはございますので、どっちかという大須賀町さんの方が上品な部分があるかな。今日はうちのまちでやっているの、若干大須賀町にエールを送りますけれども、そういう意味からも、これは一つ勉強していかなければならないかなというふうに考えております。

おかげさまで、大東町におきましては、いわゆる農工商、非常にバランスのとれたまちであって、これにつきましては町民の方々もそんなに不満はないのではないかなと思っております。大須賀町さんも同じようなことが言えるかなと思っております。

しかしながら、これからの、今この合併シンポジウムをやっていますように、総体的な組織を大きくしていくことになると、合併は好むと好まざるとに、避けては通れないということになっておりますので、そういうことで、皆様方のご意見を伺いながらより良い合併をしていく、こういうことでございます。

今日は、市長さんまだ触れられておりませんが、大東町を午前中見ていただいたということでございますので、その辺の感想をまたお聞かせを願いたいなというふうに思っているところでございます。

ただ1点、私は、これはちょっと小櫻先生からの提案とも重なるかなと思えますけれども、隣まちの大須賀町さんはいろいろなものを宣伝するに非常に上手だなというふうに思います。うちのまちでも同じようなことをやっていますけれども、その点でいきますと大須賀町さんの方が一歩進んじゃっているかなというように、そういうことも考えておりますけれども、いずれにいたしましても、非常に大東、大須賀は似かよったまちである。合併に対してもそんなに障害はないのではないかなというふうに考えているところでございます。

そうした中に、今、市長さんからもお話ございましたように、ある程度都市機能を持った掛川市、これが一緒になったならば非常に、ある程度理想の形の地域の都市が出来るのではないかなと、そんなふうに考えているところでございます。

以上でございます。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、上品で宣伝上手な大須賀町から見て、大東と掛川の魅力はどこにあるのかということについてお願いしたいと思います。

大須賀町長 ありがとうございます、いろいろ褒めていただきまして。

私どものまちにない掛川さん、大東さんの魅力、まず第1点は、市長さんも我がまちの魅力ということでお話ししていただきました東西の動脈ですね。これから第二東名もということで5大動脈になるというわけなんです、昭和の合併前、4町31村、私の町には町というところがありましたが、現在これだけその合併から差がついたというのは何かな。やはり東西の動脈というものを擁していた掛川

さん。現在は、その掛川さんの都市的な魅力を私どものまちと融合させることが私どものまちの発展ではないかというように考えているところであります。

先日も、大東さん、掛川さんをタウンウォッチングということで、大倉町長さんからもお話いただきましたが、議会の皆さんと8月5日に回らせていただきました。皆さんのまちの素晴らしい魅力を見させていただいて、本当にこんな素晴らしいところと合併をさせていただくなんてありがたいなというような思いでございます。

大東さんの工業力等、私ども、大変住民の皆さんがお世話になっているという状況でございますので、ぜひこんないいところを結びつけて、将来のこの地域に残す財産として、いいものに今回の合併をしていきたいというように考えております。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、東西の大動脈が通って、地方の中心都市でもある掛川から見て、この大東、大須賀の魅力はどこにあるのかという、その点について榛村市長、よろしくをお願いします。

掛川市長 それは何ととっても掛川は海がありませんから、海がないということは砂地がないということでもあるし、砂地農業はやれないということになって、うちの方の鉄道から北の方は、ネットウという言葉があって、べとべと張り着いちゃう土なんですね。人間も同様です。こちらの方はさくさくしているわけです。さくさく民族とネットウ民族が一緒になって、本当にしっかりした人間が出来るのではないかと。三本鍬というのは、ネットウだから三本鍬が出来たわけで、砂地では要らないわけですね。

そういう特色があると思いますが、私は市民の皆さんのおかげで長く市長をやっているものですから、大東町の町長さんでいうと、こちらのお父様の重作さんと5年ぐらい一緒にやって、それから神谷さんという方が3期12年、それから杉浦さんという方が28年、そして今の大倉さん、1年ちょっとというように、4人の町長さんとお付き合いさせていただいて、本当に大東町は見違えるように立派になりました。そういう大東町民の方々に心から敬意を表したいと思います。

特に最近の6～7年の花の開き方というのはすごいもので、シオーネもしかり、東京女子医科大学もしかり、温泉もしかり、大東農園もしかり、いろいろなことすべて立派に出来ているわけですね。私は、ですから非常に農村的なもの、田園的なものと、それから工業的なもの、商業集積的なものと非常に分散的にしながら、まちがよく配慮されて分散していろいろなものが立地していると思うんですね。

ですから、これから新しいまちをつくる時に、その集積を再集積する時にどういふ土地利用をするか、どういふ道路計画をつくるかというようなことが一番大きな鍵になると思うんです。自然もあり、農業もあり、そして商業も集積して、そして工業もある。その時に、今後、水利用、土地利用、そういうものとの兼ね

合いの中で、もう一遍まち全体を、前の大倉町長さんおっしゃった全村構造改善というものを、もう一遍新しい都市ビジョンでリフレッシュしなければいけない。その時に掛川というまちの都市機能とどういう役割分担とか、どういう連絡をつけるかというのがこれからの大きな鍵だと思います。

それから、大須賀町さんについて言えば、これまた城下町として、それから、サンサンファームなんていうこととか、赤ずきんちゃんなんていう立派な農園もありますし、それから清水邸という立派な茶室もあるし、いろいろそれなりの古いまちとしてのたたずまいがあるわけです。ですから、そういう東海道の表通りと150号線と、海と山と平野と、そういうミックスを上手にやるために、どういう一つの都市基盤整備をきちんと交通整理するかというのは大きな課題です。

一方で、もうちょっと思想的な問題があるんですね。その思想的な問題は、日本人が戦後50何年経ってみんなおかしくなっちゃったと。だから、もう一遍大東町に残っている報徳運動、入山瀬の人たちが報徳のお金を借りてあの風吹トンネルを出来た、あのときのエネルギー、それから鷲山恭平先生、そして、そのころ吉岡彌生先生、松本亀次郎先生というような立派な方が大東町から生まれているんですね。

吉岡彌生先生の女子医科大学の創設者としての今日あの大学があるわけですから、これからその伝統を生かして、教えを生かして、掛川・大東・大須賀1市2町は、自分の老後について、自分の健康管理について、自分の福祉について非常にレベルの高いまちをつくっていくということは、吉岡彌生先生が東京に医学を志して出かけていく時に、とことこ歩いて島田の駅まで行ったといいますがけれども、そのエネルギーを考えれば、我々はもっとももっといいまちをつくるために、市民の健康管理のために頑張ることはそんなに難しいことではない。

それから、松本亀次郎先生は2万人という多くの中国人に日本語を教えたという先達ですね。この方は、その2万人の中には中国の文豪と言われる魯迅、それから中国の毛沢東を助けた周恩来総理。この周恩来の記念館に行くと、松本亀次郎先生の絵が出ていますよ。そういうことですから、これから中国13億人とは日本は付き合っていかなければいけない。そういう時に、大東町の松本亀次郎先生のコネというのは、中国は人と人との関係を物すごい尊重する国なんですね。ですから、そういう意味では、松本亀次郎先生のコネを活用して、中国と新しいビジョンをもう一步踏み出す必要があるのではないかと。

それで、この間嶺向の報徳社の100周年がありまして、私もメッセージを書かせていただいたんですが、実は去年と今年にかけて中国の北京大学の日本文化研究所の方々が、これからは中国も二宮尊徳の勉強をしなければいけないと言うんですね。あなたの国は孔子様がいるから孔子でいいではないかと言ったら、孔子は経済と道徳に対して、経済を下に見て、道徳を上に見過ぎている。二宮金次郎先生は経済と道徳と同じ高さで見ていると。だから、東洋思想の極致は二宮金次郎だ。今、日本人はみんな二宮金次郎を忘れちゃっているけれども、実はこれが

一番大事な思想であるというようなことを北京大学の日本文化研究所のプロフェッサーが言っているんですよ。ですから、このまちには報徳と松本亀次郎先生という先達がおりますから、そういう点で、中国との一つの新しい都市の発展ビジョンとして、中国との関係に開拓するものが非常にあるのではないかなというようなことをちょっと考えるわけです。

ですから、東京女子医科大学の関係でこれからの予防医学ですね。あるいは、私は掛川のまちで言っている一世紀一週間人生、一世紀元気で生きて、寝込んだら一週間でさよならと、そういう人生、介護を必要としない人生、そういうみんな健康な予防医学が徹底したまちだねと。そういうようなことで、吉岡彌生先生は88歳まで元気で生きられた偉い先生ですね。そういう我々は立派な先輩というか偉人を持っているということで、その精神論から報徳、亀次郎先生、そういう吉岡彌生先生とか、そして河合弥八先生の小笠山の治山とか、岡田良一郎先生とか、一木喜徳郎先生とか、この地域には本当に偉人が出ているんですね。それをもう一遍生涯学習しながら、我々は新しい都市の一つの力にしていかなければいけないと、このように思います。

小櫻教授 ありがとうございます。

榛村市長が大東についても語り始めたらなかなか止まらないということで、何か自慢も一緒にしていただいたという感じですけども。それでは大倉町長、この大東から見た掛川と大須賀の魅力について、それと全体のまとめということも含めましてお願いしたいと思います。

大東町長 今日で3回目のシンポジウムでございますけれども、前2回はこんなにお互いのまちを褒め合ったなんていうことはございませんで、今日が初めてでございますして、いよいよ合併についていろいろな大きな課題は終わってきたかなという感じがしますけれども。いずれにいたしましても皆様方のご判断をいただくように、本当に1市2町それぞれ特質なものを持ってありますし、それから、これが一つ一緒になったならば、将来的にかなり魅力があるまちが出来るのではないかなというようなことは、共通認識として、ある程度皆様方にもご同感をいただいたものではないかなと、そんなふうにも思っているところでございます。

小櫻先生から今、総体をまとめるようなお話ございましたけれども、3回を通じてそんな私は感触を持っております。これから小櫻先生の司会進行の中で、うちのまちからもたくさんのご意見を持った方々が今日はお集まりではないかなと思いますので、一つそんなふうな形で振っていただければありがたいなと思っております。

以上でございます。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、3番目の柱で、これが今日のメインにもなるかと思っておりますけれども、こういう1市2町のそれぞれの魅力、資源というものをどう組み合わせ、融和させてまちをつくっていくかという将来ビジョンについてのお話を伺いたいと思

います。

それでは、これもまた大須賀の伊藤町長からよろしく申し上げます。

大須賀町長 今、皆さんからお話ありましたそれぞれのまちの魅力、相手方の魅力、それらを結び合わせていくということだろうというふうに考えております。掛川市さんの東西の動脈が5大動脈になろうとする、これには1日に何十万人という人が、人、物、情報が通過しているわけでありまして。これらと私どもの海、海岸、砂地等の魅力を融和させる、南北軸によって融和が可能になってくるのではないかとというふうに考えております。

その南北軸の間には、これまた非常に可能性のある小笠山、魅力的な山がございます。これらについても、これから医療、福祉、文化、いろいろなものに中間的な位置として可能性があるのではないかとというふうに考えております。これらによって、今日のテーマでもございます融和と発展に向けてということがご想像いただけるのではないかとというふうに考えております。

私どものまち、現在、国道150号、海岸砂地等のことにつきまして住民の皆さんと、今、食の安全等が言われる中で、先ほども申し上げました砂地という非常に魅力のある土地を生かして、これからの週休2日等の中で地産地消等の街道はいかがなものかということで今議論を重ねているところであります。子供たちが週2日休みになって、体験的なことが求められている総合学習等の中で、これらの砂地を活用して勉強のことが非常に進んでいくことになればというようなことも考えているところであります。

いずれにしても、足し算ではなくて掛け算の相乗効果が出てくるように、皆さんとともに考えていきたいというように思っております。

以上です。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、榛村市長、簡潔に申し上げます。

掛川市長 先ほど大体新都市のビジョンも申し上げたわけですから、あと言い残しているというか大事なところでは、若者が、就職の場はかなり出来たわけですがけれども、若者が触れ合ったり、昔、青年団があったけれども、今は青年団がなくなっちゃったので、だから若者の集まりは消防団ぐらいになっちゃったんですけども、それを楽しむ若者の触れ合いとかそういうものがあって、更に女性ですね、若い女性、出産力のある女性が張り合いを持って生きていく、遊ぶところがある、そういう楽しいまちをつくらなければいけないと思うんですね。子供がどんどん生まれていかなければいけないわけです。ところが、この地域には35歳以上の独身男性がかなり大勢いらっしゃるんです。更に、30歳を過ぎた独身女性もかなりいらっしゃるんですね。そういうことでは、やはりもうちょっと触れ合いをしなければいけないと、そういう演出が大事ではないかなということを思っています。

それが海と山と平野のクロス効果、大動脈とのクロス効果ということになって、

観光農業とか、これから入り込み客を最低でも300万人、この都市に入り込み客が入ってくるようにしなければいけない。300万の人が入ってくれば、1人1万円使えば300億円という金が落ちるわけですね。それを引っ張るだけの力は十分私はあると思います。それは赤ずきんちゃんのイチゴを見てもそうですし、この辺のトマトやっている方を見てもそうですね。そういうわけで、自然と農・住・商・工と福祉・レクリエーション施設が美しく共存した、考え深い健康市民の大勢いるまち、これが私の欲張ったビジョンです。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、大倉町長、将来のビジョンにつきまして、よろしく願います。

大東町長 私は、最初の会合、シンポジウムで掛川でも申し上げましたけれども、今、私どものまちから掛川市の市役所まで行くに、平均的には大体20分から25分かかります。これを出来ることなら15分くらいで、これはそんなにスピードを出さなくても安心の運転の中で行けるような道路整備が必要ではないかなということをも最初から提案をしてきております。これにつきましては大方の皆様方から賛同をいただいておりますけれども、まずそれが1点ございます。

それから、もう1点は高齢化の問題でございます。うちのまちは、今日お出での方は大多数が大東町の方でございますのでご承知のとおりでございますけれども、男性の平均寿命が79.9歳でございます。これは県下2番、全国でも9番目というような非常に素晴らしい、誇りを持っておりますけれども、大須賀町さんもほとんどこの数字に近い数字であるなというふうに、最近はそんな思いをしておりますけれども、若干掛川市さんは若い市ということもございまして、ちょっと違うかなと思いますけれども、これがこれから一つ、合併してもしなくても大きな政治の課題になってくるかなというふうに思っております。

こうした方々の施設をどうしていくか。同時に、この半面、少子化の問題でございます。これも好むと好まざると、今の社会状況、社会づくりの中でいくと、まだまだ少子化の傾向は大きくなっていくのではないかなというふうに思っております。これはまたすべての産業に大きな影響を将来にわたって残していきますものですから、こんなものも今のそれぞれのまちの課題でございますし、また1市2町になっても、これはお互い共通な課題ではないかなという、そんなことも考えておまして、こんなことも一つこれからの合併の重要課題として検討していく必要があるかなというふうに思っています。

同時に、これは皆様方、うちのまちの議会の皆さん、あるいは町民の方々も、要するに、合併したならば最低掛川へ行くには15分ぐらいの道路が必要であるというふうに言われております。これは共通の願い、課題であると思いますけれども、技術的にどういうものが出来るか、あるいはどういったルートが一番いいか。そうかといって、こういった道路が2本も3本も同時に出来るなんていうことは当然考えられませんものから、合併の大きな課題としてこういうものもお互いに検討していく必要があるかなというふうに思っています。そんなことでお

つなぎをしておきたいと思います。

以上でございます。

小櫻教授 ありがとうございます。

以上、3本の柱についてそれぞれ発言をいただいたわけですが、合併の必要性については言うまでもないわけでありまして、合併してそれぞれどういう魅力的なまちをつかっていくのかと。そういう意味で、この1市2町、とりわけ、海がない掛川と、長い海岸線を持ち、なおかつ山もある大須賀・大東という、これがいわば一緒になり、そしてその間を南北軸という形で道路交通というものが整備されれば、いわばそれぞれの違う個性、特徴というものを生かした非常に魅力的な新しいまちというものがつくられるのではなかろうかと。

そういう意味で、私は、ここ大東に来て、つくづくいつも感じるんですけども、こういうところで住んでみたいなという思いをやはり非常に持つんですね。こういう、いわば豊かな田園環境のもとで暮らし、同時に、10分、15分で中心部、あるいは新幹線駅という東西のいわば主要交通幹線にもアクセス出来るという、そういう地域はなかなかないのではなかろうかなという具合に思っています。

それで、今日3人の首長さんにそれぞれ発言をいただいたんですけども、実は予定されました時間も既に超えていまして、会場からぜひご発言もいただきたいということもありますので、会場の方での質問、意見というのを受け付けたいと思いますけれども、その前に、ちょっとまた、このところだけ最後に言い足りないということがございましたら、それをちょっと発言していただいて、それで会場からの質問に移りたいと思います。

それでは、伊藤町長の方で何か、これだけちょっと言っておきたいというのが最後にありましたら、いかがでしょうか。

大須賀町長 大体先ほどまでに言わせていただきましたが、私ども合併を進める上に当たりましては、今の右肩が下がるような経済の状況、また少子高齢化というような課題のある現在の行政をお預かりしていくに、今後大変心配があるということからも合併というものを進めているものでありまして、この合併は住民の皆さんの生活やサービスを守るものだということのように理解をして私ども進めさせていただいております。

そして、それぞれの相手方は大変魅力のある市町でございますので、これに不足はないというふうに考えておりますが、そういう中で合併には、一番冒頭にも申し上げましたとおり、心理的あるいは情緒的な不安がどうしても出てくるところがありますが、これからこんな魅力的な地域を更に高めていくために皆さんとともに合併をしていくわけでありまして、ぜひその辺の情緒的な不安等につきましては私ども確実にクリア出来ていくものというふうに考えておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

小櫻教授 では、榛村市長、お願いします。

掛川市長 特にございませんので、今日お見えの皆様方をお願いですけれども、出

来るだけお見えにならなかった方にいろいろなことが伝わるようお願いしたい
と思います。

小櫻教授 それでは、大倉町長、お願いします。

大東町長 当然のことですけれども、合併する場合にはそれぞれの地域がございま
す。私どものまちは、大須賀町もそうでございますが、南はございません、海で
ございますので。そうしますと、一番南の方々もやはり合併するならば北を向い
ていくか西を向いていくか、あるいは東はちょっと不可能でございますけれども、
そういう状況になってきます。そういう方々の理解をどうしてもらっていくか、
これはそれぞれのまちの責任だと思っておりますけれども、そんな作業が非常に必要に
なってくるかなと思っております。そんなことにこれから努力をしていきたいと
思っております。

以上でございます。

6 質疑応答

小櫻教授 ありがとうございます。

最後、簡潔なご発言をお願いしまして、何とか会場からの質問の時間が確保で
きましたので、それでは会場のどなたでも結構ですので、ぜひこの点について聞
きたいという方、どうぞ。マイクが参りますので、地区とお名前をお願いしたい
と思います。

質問者 大東町上土方水島と申します。

市長さんにお伺いしたいと思います。

市長さんは20万人都市構想を申されました。いろいろ私どもも合併の話を開く
中で、私もそれがいいのではないかと思います。しかしながら、今回は1市2町、
11万4,000人ということでございます。市長さんの構想が実現するよう、今後と
もご努力をお願いいたしたいと思っております。

さて、先ほど市長さんが、掛川市民、近隣の市町村の協力を得まして新幹線駅
が開通されたと申されました。市長さんは、その駅が開設されて以来、小笠・掛
川の融和についてどのような取り組みをなされたか、一つお伺いしたいと思います。

また、一つ、1市2町が合併しますと大変に南北に長い地域となります。先ほ
ど来、サンドイッチ状態で東西の交通網は整備されていると申されました。確か
に新幹線、東名高速道路、1号線、150号線、それにバイパスといえますと7本
の幹線道路が出来ているわけでございます。さて、その時に大倉町長が、昔は自
転車道路で掛川へ行ってきたと言われておりましたけれども、その自転車道路が
今は少し整備されたばかりで、何ら南北の幹線道路というものは出来ておりませ
ん。私は上土方の工業団地のすぐ東側に住んでおります。工業団地が出来る時に、
近来この国にはないような道路を5年以内に掛川に開通されるから、おまえたち
も協力せよというようなことで私どもも協力いたしました。しかしながら、残念

なことに大東町内ですら現在出来ておりません。一日も早く西幹線を掛川まで開通して、サンドイッチの中を突き通すような風通しのいい道路が出来ると望みたいと思います。

質問、以上終わります。

小櫻教授 ありがとうございます。

お答えは最後にまとめてお答えいただきたいと思いますので、他には、どうぞそちらの方で。

質問者 大須賀町の山下でございます。

県下の谷間小笠郡と言われた一時代がございます。特に教育と経済が非常に劣っていた。しかし、現在はどうでしょうか。先代大倉町長は先が見える政治家でございます。そして全国でも町村会長をやって、全国にその名を馳せました。榛村市長は、どうしても新幹線を掛川に停めるんだという強い意志と強靱な体力と努力によって、掛川市民はもちろんのこと、近在町村、あるいは企業、各種団体の協力を得て新幹線を停めました。ラジオでもテレビでも掛川、掛川と何百回も言う。いわゆる掛川市をアピールし、立派な市に育てました。

この掛川市と、大倉先代町長にも勝るとも劣らない掛川市長をもってしても小笠郡下で割れる。小笠は一つ、文化も経済も環境も農業もみんな一緒にやったじゃないか。少なくとも1市5町でもって立ち上げてもらいたいと思ったのが意に反し、非常に残念でたまりません。浜岡町はいち早く方向を決めまして、まあやむを得ぬかと思いますが、少なくとも小笠町、菊川町を、榛村市長をもってのリーダーシップであってもこちらを向かない、それはなぜだろう。話し合いのあったその内容等々、それから、小笠町、菊川町がどうしても一緒になりたくないというような、なるほどという大義名分があるのかどうか。

また、私も菊川町に何年かいまして、町民の人とも40年いましたのでいろいろな方に聞きますが、何だいな、おらんところはどうやって外れる、いわゆる町民不在ではないかという声がほとんどでございます。また、大須賀町、大東町の人たちも何でこないだなと。市長さん、今更というようなことになるかもしれませんけれども、市長さんは会長としてのあいさつの中に一縷の望みがあるというようなことも出ましたので、ぜひあなたの指導性を発揮して、そして仲よく1市4町で出来ることを望んでやまない次第でございます。

以上。

小櫻教授 ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。どうぞ。

質問者 大東町の川口菊雄です。

私どもの方では町内の説明会がございましたけれども、その後、今年に入りますして5月から10回ほど新聞にこの合併協の経過がそれぞれ発表に、記事が載りました。これは新聞発表でございますから1日遅れの記事ということになりますけれども、一番最後に、これは新しいことで申しますと、今年の6月17日ござい

ますが、菊川町の方へ合併についてこれは議会に付すという回答をしたということが出ておりました。

それから、今度はちょっと飛びまして8月6日でございますけれども、小笠町長さんの方へ菊川町との合併要請書を提出したということでございます。その時のお言葉といたしまして、これはこの協議会の会長さんである榛村市長さんのことだと思っておりますけれども、1市2町の中に1市4町の要望が強いということを再確認したということで記事が載っております。もう一つ、今まで合併について、先ほどもお話がありましたが、介護とか子育てとか、あるいは消防とか、こういう生活論を論じなくて全てを進めてきた。これに対しての反省をされております。

そういうふうな経過がありまして、先ほどお城の話が出ましたけれども、この高天神城へ上りますと小笠の沃野はすっぼりと向こうの牧ノ原の地平線まで見える。そこには小笠の産物でありますお茶、掛川にも産がある、お茶がある、あるいは広く水田が広がる。南を見れば、先ほどからたびたび出ております砂地の展開、こういうことがあって、同じ産物をもとに今まで育て生産してきたという大きな広がりを持っているわけでありまして。それとあわせて、今、この4町の合併の意識の強いということを再認識されたと、こういったところを踏まえて、今後どういうふうにしていくでしょうか、お伺いしたいと思います。

あわせて、この8月6日には、小笠町からの合併についての回答を、まだ三つの首長さんからの回答をしていないというのが8月6日の記事でございます。要するに、菊川には回答したけれども、小笠町には回答していないと、こういうことであります。これ等も今後どういうふうに進めていくか伺いたいと思います。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、どうぞ。

質問者 皆さんの意見を聞いて、お互いにいいところばかり言っているものですか、物すごく何か合併に夢があるので、本当に夢あるのでしょうか。すみません、浜野新田の五島と申します。

合併に夢があるように聞こえるし、実際そうかもしれませぬし、そうでないかもしれませぬが、少し質問させていただきます。

合併に関して今まで何回かの説明会がありましたが、住民の意見をまちづくり計画にいかんにか反映させるかどうかということだと思っております。現実には合併ありきで進んでいるようで、住民の思いが本当に伝わっているかどうかというのは、私は何となく住民の思いが置いてきぼりのような気がして少し不満です。

そして、今現在生活をしている中で、良くもなく悪くもなく暮らしているものですから、合併をあえてしなくてもと私自身考えもありますが、でも、しかしこれからの世の中、地方自治を考えた時合併せざるを得ないというのも正直なところだと思っております。合併したとしても、絶対すべての面で今の生活を悪くならないようにして欲しいと思っております。

すみません、前置きが長くなりましたが、三つほど質問させていただきます。

一つ目、期限内に合併すれば普通交付税の算定特例や合併特例債など財政的な特例が受けられると聞いていますが、その使い道について具体的な予定を組んでおられることと思いますので、その内容をぜひ住民に情報公開をしてください。

二つ目、掛川、大東、大須賀など、特養老人ホームなどを初め老人福祉施設がたくさんありますが、サービスは今までより落とさず、料金は上げず、不公平なくサービスを受けられるよう約束して欲しいです。

三つ目、生活環境の関係ですが、現在大東町では町部では公共下水道で、村部では農業集落排水事業として全町下水道計画が進められていますが、合併によって大東町の下水道工事が途中で中止されることなく、最後まで完了するよう絶対お願いいたします。

以上です。

なお、私は、これは意見ですけれども、住民から寄せられた全ての意見を実現することは不可能だとは思いますが、自分の提案した意見がその後どうなったのか、だめの場合は何でだめなのかというリアクションがあれば、皆さんの関心はもっと深まると思います。

以上です。

小櫻教授 ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。どうぞ。

質問者 大東町の平松です。

素朴な質問です。質問ですけれども、回答はよろしいですが。提案になりますけれども、現在当協議会の小委員会において、新聞報道なんですけれども、新市名の募集をしているそうです。昨日からか今日からか始まって、来月16日までだそうです。まだ今合併が決まったわけではないと思います、1市2町の。その時点でなぜ新市名の募集の必要性があるのかどうか。もし枠組みが変わった場合どうなるのか。それまで考えているのかどうか。

例で言いますと、小笠町・菊川町も今募集して、もう締め切ったようで、10まで絞ったそうですけれども、磐南も今募集しているそうですけれども。いずれもほとんど対等合併ということなんですけれども、現在あるまちの名前も候補の中に入っているそうですけれども、対等という以上は現在の市名、町名は除いた方がふさわしいと思うんです。

それと、その応募する資格、広く募集したいという気持ちはわかるんですが、あくまでもそこに住んでいる人の応募に限って欲しいと思います。よその赤の他人に付けてもらった名前では、ちょっと喜べないことがあると思います、感情的に。

以上です。

小櫻教授 ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。どうぞ。

一応時間も限られていますので、あと他にももしありましたら、よろしいですか。

この方を最後にということにしたいと思いますので。もう1人ですね。じゃ、そのお2人で最後ということにしますので、その後、3人の首長さんにそれぞれご回答をお願いしたいと思います。どうぞ。

質問者 大東町の五島と申します。

大東町の住民の気持ちと合併の今の情勢が大きく食い違いが生じていると思いますが、我がまちとしてはどう考えているのかということをお聞きしたいと思います。

それと、もう一つ、任意協議会では合併のメリット、デメリットの説明が、もう少し住民にわかるように説明をいただきたいと、わかりやすい説明をいただきたいと思います。

以上です。

小櫻教授 ありがとうございます。

どうぞ、最後です。

質問者 大倉町長に聞きたいですけれども、この前、大東民報という共産党の広報に載っていたですけれども、3歳未満の保育料とか、国民健康保険とか住民税とかというのは、掛川は大東、大須賀から比べて物すごい高いですけれども、こういうのはどういうふうにするのですか。それをお伺いしたいと思いますけれども。

それと、大倉町長も一応住民の代表ですから、国の代表ではないで、もうちょっと貧乏人のことも考えて合併をやってもらいたいと思います。

それと、夢咲農協は掛川抜きで合併しておりますよね。農協の、農家のこともちょっとは考えていただきたいと思います。それで私個人の意見として思いまして、掛川抜きで大須賀と大東だけで一時合併して、いずれ菊川、小笠、掛川と、そういう順序に持って行ってもらいたいと思うけれども、来年までにはまた衆議院の選挙があると思いますので、選挙の時住民に投票してもらって、それで決めてもらいたいと思います。

以上。

小櫻教授 ありがとうございます。

それでは、7人の方にご発言、ご質問、ご意見をお願いしました。

それでは、一応組み合わせの問題等々いろいろございましたけれども、あえて私の方でまとめませんので、3人の首長さんにそれぞれコメントをしていただきたいと思います。

それでは、掛川市長への質問が多かったようですので、最初に榛村市長の方からお答えいただいて、その後、伊藤町長、大倉町長という形でご発言をお願いします。

掛川市長 時間の関係もありますので、ずばり的にお答えしますが、20万都市というのは、それにこだわっているわけではないんですけれども、一応市に位みいなものがつくられているんですね。政令指定都市、中核市、特例市、一般市と。だから、せめて特例市になるには、20万人以上となっていますから、それで言って

いるということが一つあります。

それから、今まで新幹線の駅造ったのに掛川市長は南部のことを大事にしなかったのではないかという批判をよく私は受けます。それは確かに反省すべき点がたくさんありまして、例えばもう少し早く何とかあの高瀬線なんかも開通していいはずだと。ところが、うちの方は地図混乱地域があって、地図混乱地域の解決がなかなか出来ないというようなことがあったわけですが、いろいろなことで市立病院を立派に信頼おけるものにするということ、駐車場も広くしておくということが、南部の方々も病院に来られる時に役に立つのではないかというようなことを初めとして、いろいろなことを考えてはきましたが、実感としてまだ十分でなくて、よく菊川の方々にも怒られるんですけども、どうもこの10年を見ていると、掛川のまちが一人勝ちみたいになっていて、どうも自分のところだけやっているのではないかというご批判を受けて、それは私の人徳のないところでありまして、これからこれを埋め合わせしていくことを考えなければいけないし、また、これから計画の中です、あと2年ではないですけども、あと1年半ありますから、その中できちっといろいろ一体的な計画が出来るようにしていかなければいけないと、このように思っています。

それから、郡下でなぜ割れるんだというようなお話とか、なぜ2町だけが独立しちゃったのかとか、それはなぜだというお話がございましたが、これは私が断定的に言うということは問題がありますから、いろいろ言われているところを総合して幾つかの理由を言います。今、特例で3万5,000人でも4万7,000人でも、ここ1~2年でやれば市になれるんですね。ですから、菊川・小笠合わせて4万7,000人、市になろうと、とりあえず市になりたいと、こういう気持ちがあるのではないかと言う人があります。

それから、もう一つは、菊川のうちの約3分の1の人は牧ノ原から空港の方を向いていると、相良の方を向いている人もかなり多いと、そういう人もあります。

それから、顔の見える役場でありたい、顔の見える行政をやりたいと。そのためには、いきなり1市5町あるいは1市4町、16万、20万というのはちょっと大き過ぎるのではないかというようなこと。

それから、更に2段階論というのがあって、いずれ一緒にならなければいけない。いずれ一緒にならなければならぬけれども、とりあえずこの10年は別々でいきたいと。次の2段階目だと。これは袋井市長も同じことを言っているんです。2市6町で一緒にいくと26万人で、小笠山を中心にいきたいねと。だけど、いきなりはそれは飛躍し過ぎる、住民感情ともちょっと違う。だから、とりあえず袋井は1市2町、掛川も1市2町、それで10年やって、それからその次考えようと、こういう2段階論というのがあります。

それから、もう一つは、これは私の掛川が至らない点ですが、菊川の方々にとっては、掛川と一緒にになると、都市計画も、その他いろいろなことが掛川中心主義になっちゃうんじゃないか、だから心配だというようなこと。

今、いろいろそういうものが重なって、2町という枠組みの話がずっと既成事実的にどんどん枠組み論で深まっちゃったわけですね。したがって、さっきの生活論から入らなかったことが非常に残念ですけども、今後どういう展開になりますかわかりませんが、とりあえず時間切れということもあるので、1市2町でやっておこうということになっているわけです。

それから、住民発議についてのお答えは、今のところは1市2町の首長において小笠町長さんに、今、議会と相談中であるから、付議するかしないかはまだ決まっていない。何とか小笠郡は割らないように再考出来ないかというような意見書を出してあります。それについてのまだお答えは聞いておりませんが、しかし昨今の新聞等を見ると、もう2町だけのシンポジウムで、かなり新都市の建設のこともお話し合いをしているということですから、なかなかそれも難しいかなということでもありますので、今日この会が終わって、1市2町の首長において善後策をお話し合いをしたいと、このように思っています。

それから、女性の方でちょっとお名前を聞き損じましたが、合併についての必要性はわかったけれども、どうもいいことづくめで、当局づくめで、当局の合併ありきという話で、合併ありき過ぎるのではないかというご指摘がございました。全く住民・市民の方からいいますと、そういう感じは拭えないと思うんですね。無理もないと思うんです。ですから、私は、なぜ必要かという説明も大事ですけども、これからは、この1年半の間にそれぞれの生活上の問題やいろいろな具体的な課題についてご質問していただいて、それから要望もしていただいて、これからその新しい都市をつくるための合併の論議の新都市のビジョンとか、問題、課題を一つひとつ丁寧に具体的に論じ合っていくというのがこれからだというふうに思うんです。

ですから、先ほど、私は良くも悪くもない暮らしをしているんだと、あえて合併する必要ないじゃないのと、こういうお話でした。それは健全な庶民感情ですね。健全な庶民感情ですが、しかし今、日本国は、大げさに言うと、中国からも、イラクに戦争に行くとか、いろいろ日本がもっとしっかりしなければいけないという状態なんですね。ですから、地域は平和に暮らしているから、そんな余分なこと考えなくてもいいというやり方では通らないので、やはり小泉内閣はだめじゃないかという意見もあれば、あるいはこうしなければいけないといういろいろなことがあって、やはりこの1市2町はそれぞれにおいて勉強して、それで、しっかりした地域、ここはいい地域だ、幸せな生活だというものを築いていく。それが日本人としてのこれからいろいろな大きな世の中の動きに対してきちんとした考え方を持っているまちだ、ビジョンの持っているまちだと、そうなるなるためにいろいろやっつけていかなければいけないということですので、ぜひご理解をいただきたい。

そのために特例債というのが約300億円ぐらい使えるわけですね。その300億円の特例債、7割政府がお金を返してくれるというのは、ただどれでもやればいい

というものではなくて、合併の1市2町が一つの都市になるために必要と思われるものについて使うことが許されるわけですから、1市2町が一つになる、例えば、さっき15分計画、クォーター計画と申し上げましたが、そういうもののために使うということがあるわけです。

その場合に、できるだけ不公平にならないようにするとか、できるだけ料金的なものは低い方に合わせるとか、それから、サービスは高い方に合わせるとか、そういうようなことを配慮しつついろいろなことを考えていかなければいけない。今既存の1市2町が別々に進めている事業がいろいろあるわけですね。ですから、それはそれとしてやらなければいけないものもあるでしょうし、それから進度調整、進度の調整という言葉がありますが、進度調整をして足並みをそろえてやっていくというやり方もあるでしょうし、それから、消防なんかも小笠郡として消防が一つになっているわけですね。それで掛川は掛川の消防、これをどうするかというような話だって具体的にはこれから非常に詰めていかなければいけないわけですね。ですから、下水に限らずいろいろなしつかり調整をしていく。

しかし、その場合であっても、とにかく当局や役人がいいようにやるんじゃないくて、住民・市民から見てこれが公平であるとか公正であるということを旨としてやっていかなければいけないと、こう思います。

それから、後は大倉町長さんに対するご質問が多かったと思いますが、新市の名前は、これはおっしゃるように、そんなに今から募集しなくたっていいじゃないかという考え方もあるわけですが、合併について関心を持っていただくとか、みんなに考えていただく時間があつた方がいいとか、それから、名前でもって、最後にいろいろやっていて名前をつぶれちゃったという話もあるんですよ。だから、名前のことも早く考えていただいた方がいいのではないかとということから起こっているわけです。

それから、保育料とかその他いろいろな料金の違いとか、税金はみんな税率は同じですけども、都市計画税があるとかないとか、そういういろいろな調整すべき点がありますので、これはこれで小委員会や、あるいは幹事会でしつかり詰めて調整していかなければいけない。

その難しさを上げれば非常にきりがないくらい難しいことはあるんですね。全部で1,830項目調整しなければいけないことがあるんですよ。それを丹念にほどこきながら、さっき申し上げた夢のあるビジョンをつくりながら、その課題を丹念にほどこきながら21世紀の私たちの地域をつくろうと、こういうことでありますので、ご理解いただきたいと思います。

小櫻教授 ありがとうございます。

では、伊藤町長お願いします。

大須賀町長 それでは、私の方から。掛川の新幹線の駅が出来る時に、それぞれの近隣の町村から寄附をいただいて、掛川市長さんは新幹線駅を造った。しかしながら、それらの約束事といいますか、南北の交流等について、目に見えるものが

なかなかないというようなお話はどこでもいただくわけですが、大須賀町というのはその一番の被害者だというふうに思っております。あの山の中はこれだものね、まだ。皆さんのまちと1戸当たり同じお金は出しておりますが、私どものまちでは、そんなにこのことについて住民の皆さんが言われる方はおりません。

今度合併をして、一つの市になってこれらも達成をしていく、その方がより早く効率的ではないか。なぜならば、行政が違えば、やっている政治が違うんです。こちらのまちから向こうへ入り込んでいって何かするという事は出来ません。そういう中では、一つの市となって、その中で政治という力の中で頑張っていくということが、これらの解決の手法としては21世紀一番早いのではないかというふうに私は考えております。

それから、合併の話なかなか難しくて、皆さんからもお話をいただきますように、私どもも、出来れば20万の特例、市長さんは3市13町1村、中核市ということで仕掛けをされて現在の状況まで来た歴史がございます。3市13町1村がいいんだといっても、やはり相手があるわけで、それぞれのまちがそれぞれの歴史の中で育んできた民主主義が、今、合併という自らが決断することについて、私は、こういう枠組みがいいと自分たちの政治等が、民主主義が出している結論が現在のこういう形になっているというふうに考えております。

今申し上げたとおり、人のまちへ行って私どもが1市4町がいいと言うことは出来ないんですよ。ひたすらお願いをしてきました。市長さんと、杉浦さんも含めて、何回、向こうの2町さんにも行きました。その後、大倉さんとも何回行ったでしょう。でも、向こうの皆さんからは現在のようない回答しかいただけないというのが現実なんです。それは向こうの皆さんがやはり歴史の中でそのまちが育んできた、民主主義が、今回の合併に対して2町でいいんだと、いくんだという結論ではないかというふうに考えております。そんなふうに理解するしかしようがないといいますが、そんな考え方で私は現在おります。努力してきたことにつきましては、ぜひお認めをいただきたいというふうに思っております。

五島さんからいただきました特例債の関係の使い道は、市長さんがお話を申し上げましたとおり、現在、小委員会等におきまして、どんな将来の姿を描き、どこにこの特例債等をどう使っていくことが一番融和を図っていく時にいいのかということをお話しいただいておりますので、またその委員会等の結果ができ次第、皆様方にそれぞれのまちで説明会を開催していくということになっておりますので、お待ちをいただきたいというふうに思っております。

老人福祉施設等のサービスのことでございますが、特別養護老人ホームにつきましては、私どもも大東町さんも福祉法人さんをお願いして現在介護等をやっております。直接町がやっているものではございませんので、独立した団体がやっているわけですので、これらのサービスが、合併したからといって上下したり何か変化をするということは決してございません。

あと、公共下水道等それぞれ今計画されているものが進められていける力強い1市2町であるというふうに理解をいたしておりますし、また、市長さんからもちょっと話に出ました消防等につきましては、広域化をしていくものというふうに現在のところ私は考えておりますが、そうなっていけば、更に皆様方へのサービスの向上、質の内容は高まってくるというように考えております。これも合併がなせる技だというように思います。

新市名の関係につきましては、先ほど市長さんからお話をいただいたとおりであります。今から1,832項目にわたる協議事項がございますので、その中で今皆様方のサービスに直結するような公共料金等のことにつきましても議論をいただいているところでありますので、またその結果を踏まえて皆様方に説明会をし、これならば将来に夢が持てて、合併をしていったらいかがでしょうかというような内容で皆さんに説明会を申し上げて、最終的にはそれぞれの議会で議決をいただくということになっておりますので、今はそれらの細部にわたる協議を進めているということで、これからも協議会だより等を通じまして皆さんに、またインターネットも開示をいたしておりますので、情報は逐次ご案内を申し上げていくというような内容になっておりますので、どうぞご理解やご協力をよろしく願います。

小櫻教授 それでは、最後に大倉町長、よろしく願います。

大東町長 若干、今それぞれお2人の方々が答弁してくれたのは、私に対する質問にも含まれておりますものですから、その辺は割愛をさせていただきます。

最初、大東町での説明と違っているのではないかというご指摘がございました。これは恐らくうちのまちでやった時の地区の説明会の中で、私がそれぞれ地区説明会の中で合併の枠組みについて、例えば今話題が出ているように、掛川を含めての合併というのは地区説明会の中、大体9地区で1,000人の方々が出席をいただきましたけれども、このうちの1割ぐらい、この1月の初めには掛川との合併をという方々はございませんでした。この点ではないかなと思っておりますけれども、これはそういうことでこの時の説明はしてきておりますものですから、今はそれが若干変わってきております。

変わってきている理由というのは、やはり私がこの当時説明会の中で掲げてきた、出来ることなら小笠郡を割らないようにというような説明をしてきましたけれども、これがどうしても不可能になってきた。完全に不可能ではないけれども、不可能に近いような今状況でございます。今それぞれ市長さん、伊藤さんからお話ございましたように、菊川・小笠では二つの町でやっていくというふうにかなり進んでまいりましたものですから、こういうことを考えますと、ちょっとその点につきましては残念ながら不可能に近いではないかなというふうな思いがしているわけでございます。そうしますと、こうした数字も変わってくるわけでございます。

それから、もうちょっと説明の中にメリット、デメリットをはっきりしなさい

ということでございます。これも説明会に行った中ではっきりとそういうことを意見として出されてのお話もございましたけれども、なかなかそういったはっきりしたご意見が非常に少なかったというようなことも私はそんな理解をしておりますから、その辺がご不満があろうかなというふうに思っております。

それからまた、保育料とか国民健康保険の保険料の問題も出ました。これは掛川市さん、確かにうちのまちとは差がかなり大きいわけです。これは小笠郡の中で浜岡町さんとうちのまちが大体同じ、他のまちとはかなり差があって、うちのまちは非常に低い状況で今推移をしております。

しかしながら、今お話ございましたように、これから1市2町の中でもすり合わせをしなくてはならない必要項目が1,830項目余あるわけでございます。こうした中でこんなことを一つ洗いざらいぶちまけた中ですり合わせをしていく必要があるわけでございますので、これからの作業にかかっているかなというふうに思っているところでございます。

貧乏人のことも考えて意見を言ってくれ、あるいはそういうことも十分真剣に考えていけということでございます。これは当然のことでございます、私どもはそういう分け隔てをした中での意見集約は絶対しておりません。これは役場の会議の中でもきつく確認をしてやっていることでございますので、絶対にそういうことはしていかないというふうにはっきりと申し上げておきます。

それから、農協の話も出ました。今日もこの中に農協関係の方がおいでだと思いますけれども、農協は小笠郡の中で合併をして鋭意進めてきているわけでございます、このことにつきまして、農協さんといたしましては、やはり小笠郡を割らないように一つ合併をしてもらいたいという意見も我々もはっきりと聞いております。若干そういう行き方と今の行き方が違っておりますものですから、これらもはっきりとこれからすり合わせをして、お互いに理解をした中で進めていくことが大事だというふうに思っております。

それから、何も掛川と一緒にならんでも大東と大須賀で一緒になればいいではないかというようなご意見も出ました。これは今うちのまちと大須賀町さんではごみの焼却場等を2町の中で進めていますものですから、そういう当然お考えもあるわけでございますし、これはそんなに困難なことではございませんで、いつでも出来ることではないかなというふうに思っております。

同時にまた下水の話も出ました。公共下水、農業集落排水でございますけれども、公共下水は大東町の場合は、皆様方もご承知のように公共下水エリアの中では進捗率は約40%、これは1市2町の中ではうちのまちが断然に進んでいるというふうに思っております。農業集落排水につきましても、今、土方地区を進めております。これから農集排につきましてもは佐束地区を続けてやっていきますけれども、下水関係につきましてもは一步うちのまちが先行していると思っております。これは、これから合併する中でもこの形で進めていく考えでございます。いずれかのどこかですり合わせは必要でございますけれども、鋭意こういう形で進めて

いく考えであります。

それから、最後に新市名でございますけれども、これはやはりこれからの問題であるというふうに思っておりますものですから、これはいろいろな方法がありますので、広い範囲の中から新しい市名につきましては決めていくのが当然であるというふうに思っております。

以上、私に対します質問につきまして回答をさせていただきました。

小櫻教授 ありがとうございます。

以上で、会場の質問に対する3人の首長さんのコメントは終わりたいと思います。

私も実は新市の建設計画の策定委員をやっているものですから、その立場から最後にちょっと一言だけお話をさせていただきます。

組み合わせの問題というのが、やはりこの地域で非常に大きな課題、テーマだと思いますけれども、私は合併の組み合わせと実際の都市の発展の動向というのは違っていると。そして恐らく合併、1市4町、あるいはもっと大きな枠組みで合併をしても、例えば掛川と菊川、あるいは掛川と袋井という関係の都市の発展というものは続いていくだろうと。

そういう意味で私は、実は私の個人的意見ですけれども、この1市2町の枠組みで合併が行われるということは大東、大須賀にとっては非常に大きなメリットがあるであろうと。なぜならば、もし1市4町でいった場合は、掛川、菊川、小笠、浜岡、御前崎というラインが中心になって、この大須賀、大東というのはそこから取り残されていく可能性が非常に強い。あるいは、もっと大きな枠組みでいっても、掛川、袋井、磐田、あるいは浅羽とかですね、そういうつながりというものが強くなっていったら、この大東、大須賀というのがそこで取り残されてしまうと。そういう意味では、いわば1市2町という枠組みで合併が先行することによって、合併による特例債等々のいろいろな事業が、この1市2町の枠内の南北軸の整備という形に主要な事業が割り当てられる。そうすることによって、この小笠山一帯というものの開発整備というものが進むと思います。

それと、私は小笠山というのはどうも押しくらまんじゅうみたいですね、この周辺の市町が皆、背中を向けて今までやってきたと。でも、この中遠、東遠のこれからの発展を考えた時に、小笠山というものが非常に大きな資源として可能性を秘めている。そういう意味では、小笠山が1市2町の接着剤として、どれだけいわば結びつける効果を発揮出来るかどうか。接着剤としての機能がより充実すれば、ほっといても菊川とか袋井だとか、そういうものがくっついてこざるを得ないともいう。そういう意味では、私は、小笠山というものをどういう形で活用するのか、それは開発するというだけでなく、いわば快適な生活環境、豊かな自然環境を残した上で、より高次のものをどうその中に点在させていくかという、そういう意味では私は、この1市2町という枠組みで南北軸を整備し、そして小笠山というものを魅力的な地域の資源として磨きをかけていくとい

う、それが将来の発展に非常につながっていくのではなからうかと。

それと、やはりなぜ急ぐのかという声もあるんですけども、これは全国いろいろなところへ行って同じ声を聞くんですけども、私は、今合併の特例法という期限内でやろうとすれば、住民のきめ細かい意見を聞いていると、とてもじゃないけれども期限内には出来ない。そうすると、そのメリットというものが受けられない。

それから、もう一つは首長、リーダーの責任というのは、地域の将来を考えて、自らの責任で決断をすることが地域のリーダーの仕事だと。これは前のNECの社長が言っていたんですけども、今日、明日のことはマジョリティーに聞けと、重役会議の多数決に従えばいいんだと。しかし、住民の多数決に従っているだけであれば、別に要らないんですね、町長とか市長は。むしろ、町長、市長が必要なのは、まちの将来を見て、そして深く思って遠くを全部見ているからゆえに、あえて決断をする。すなわち、あさってのこと、その先のことはマイノリティーに聞けという。

そういう意味では、私は首長さんの責任においてこういう1市2町という枠組みを決断されて、そしてまちづくりという方向に一步踏み出されるという。そういう意味で私は、それが良かったか悪かったかというのは正に歴史に委ねられると同時に、私は、これからのまちづくりは行政だけでいくのではなくて、市民自らの責任においてどういうまちをつくっていくのかという。そういう意味では、今後そういう形で評価が下されるのではなからうかなという具合に思っています。

限られました時間で非常に多くのことを議論しなくてはいけない、話し合わなくてはいけないということで、実は時間も大幅に既に超過しまして、これはちょっと司会として非常におわびをしなくてはいけないことでもありますけれども、それだけこの問題というのが非常に重要であり、皆さん方の関心も高いということで、こういうまちづくりに向けての第一歩、既に一步踏み出されていますけれども、今後も大いに議論をしていただいて、あるいは合併協議会、あるいは新市建設計画策定小委員会の情報も極力、できるだけ公開していますので、ぜひその議論に参加をしていただいて、一緒に新しいまちをつくっていただきたいという具合に思います。

それでは、長時間にわたりましたが、これでパネルディスカッションは終わらせてもらいます。

どうもありがとうございました。

7 閉会

司会 ありがとうございました。

小櫻先生、そしてパネラーの皆様、どうもありがとうございました。

それでは、どうぞ皆さんご退席ください。皆さん、どうか温かい拍手でお送りくださいますようお願いいたします。どうもありがとうございました。

皆様、長時間にわたりましてお付き合いくださいまして本当にありがとうございました。

掛川市から大須賀町、そして本日、大東町、3か所でこのシンポジウムが開催されましたが、もしかしたらこの会場が一番熱心なご意見をたくさんお寄せいただけたのではないかと、そういうふうに思います。これを機に、ご家庭、地域等でまた議論の方をますます深めていただきますようお願いしたいと思います。

それでは、以上をもちまして本日の日程全て終了とさせていただきます。

もう一度皆様をお願いいたします。本日初めにもお願いいたしましたが、アンケート、ぜひとも皆様からもっともっとご意見の方をお伺いしたいと思っておりますので、どうかお帰りの際、受付の回収箱にご投函くださいますようお願いいたします。

どうか落とし物、お忘れ物ございませんよう、今一度お確かめの上お席をお立ちくださいますようお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。どうぞ気を付けてお帰りください。

閉 会 午後4時40分